
めがりす！！

ジョナサン二世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めがりす!!

【Nコード】

N5075W

【作者名】

ジョナサン二世

【あらすじ】

けいおん！×エースコンバットシリーズ

ユーゴスラビア大陸に惨禍を巻き起こした大陸戦争。

その悲劇は、青春を謳歌すべき少女達をも巻き込んだ。

ISAFの英雄は勝利のために空を飛び、エルジアの少女達は守るべきものの為に空を舞う。

英雄と少女達が上空で出会うとき、全てが変わる

再び

感想大募集中。感想頂けると、作者は泣いて喜びます。

ぶろろーぐ

私が中学生の頃、空から巨大な隕石が降ってきた。

地球に直撃すれば、人類を滅亡させると言われた小惑星ユリシーズ

その小惑星を打ち砕くためにユージア大陸の各国は、共同である兵器を建造した。

ユージア大陸中心部にある中立の小国家サンサルバシオン。
その郊外に聳え立つ、天を睨む8つの巨砲

その偉容は、私も当時テレビで見たのを覚えてる。

その名は、ストーンヘンジ。

小惑星ユリシーズがロシユ限界を突破し、大小多数の隕石となり地球に降り注ぐ。

その隕石を打ち砕く任を、ストーンヘンジは負っていた。

そして、運命のその日

1999年7月8日

ロシユ限界を突破したユリシーズの破片は隕石となって地球に降り注いだ。

私の住んでいる国

ユージア大陸最大の軍事国家エルジア共和国にも、その破片は容赦無く落下した。

ストーンヘンジを持っても、隕石の驚異からは逃れられなかったんだ。

結局人類滅亡は回避できても、大勢の人の命が失われた。

私の家族が住んでいた首都の近海に隕石が落下してお母さんが津波で死んだことも、私の記憶にはつきりと残ってる。

そして国境には、国を失った人たちが集まった。

私が

「あの人達はどうなるの？」

と聞くと、エルジア共和国の軍人だったお父さんは優しく私に言った。

「唯は気にしなくていいよ。」
と。

大陸最大の国家であるエルジアに、周辺の小国は難民問題を押し付けたんだ。

そしてこれが原因で、元々仲の悪かったエルジアと周辺諸国の対立が決定的となった。

それから程無くしてエルジア共和国は隣国のサンサルバシオンに侵攻、大陸戦争が始まった。

周辺の小国との問題を武力で解決するという最悪の方法を、私たちの国は選んだんだ。

それに対抗して周辺の小国家はISAFと言う連合を設立。

エルジアに対抗した。

でも、エルジアには戦争に勝利する秘策があった。

あの忌まわしい隕石を打ち砕くために造られた8つの巨砲、ストーンヘンジ。

隕石迎撃用に建造されたストーンヘンジは対空砲として運用した場合敵を超長距離から一方的に撃墜することができた。

戦争を勝利するためには、ストーンヘンジが必要だ

ストーンヘンジを接收するために、エルジア軍はサンサルバシオンに進行したんだ。

そして、陸軍の士官であるお父さんは戦地に赴き、家は私と憂の二

人になった。

春、高校に進学した私には、“りっちゃん”こと田井中律、“遷ちゃん”こと秋山遷、“ムギちゃん”こと琴吹紬という友達があった。

“あずにゃん”こと中野梓という後輩も出来た。戦争なんて遠くの物語。そう思っていた。

私が高校二年生の秋、ムギちゃんが軍の航空予備士官学校に行くことがわかった。

ムギちゃんのお父さんは国を守るために自らの一人娘を国の盾にすることにしようだ。

ムギちゃんを独りには出来ない。放課後ティータイムはいつも一緒だから

大財閥を率い、大陸戦争中エルジアの兵器の70%を供給していたムギちゃんのお父さんの力があれば、私たちを軍の航空予備士官学校に転入させることは簡単だった。

そして私たち五人は、大空の戦いに身を投じることとなった。

そう言えば私は戦争が始まったその日、政府の報道官がテレビの中でこう言っていたのを覚えてる。

「正義は我々にある。勝利の女神は必ずや、我々エルジアに微笑むだろう」

と言ってたのを。

おーたむさんだーさくせん！

…

2005年9月19日エルジア共和国首都ファーンバンティ

「首都の空が敵だらけだよ…信じられない。」

私はそう呟きながら、航空予備士官学校にある滑走路から、朱に染まるファーンバンティの空を見上げていた。

「まさかこの空をISAFの戦闘機が飛ぶなんてなあ…」

りっちゃんもそう呟いて、空を見上げた。

茶色のショートカットに黄色のカチューシャを着けているりっちゃん。

いつもは笑顔を絶やさない彼女の顔も、今日ばかりは暗かった。

二人で見上げる空は、もう私たちの空じゃない。

爆音を響かせながら私たちの頭の上を二機のラファールが飛ぶ。それはエルジア軍の戦闘機じゃない。

機体に描かれたスリーアローヘッズのマークは、ISAF軍機の証だ。最早ファーンティの制空権は、ISAFの手に渡ってしまった。

「り、律う…敵は、どのくらい飛んでるんだ？」

漣ちゃんは先程から聞こえる爆音に怯えていた。今も、本来ならばそこに在るべき航空機の無い格納庫の隅で震えている。自慢の腰まである黒髪で顔は隠れてしまっただけに見えるが、恐らくは半ベソをかいてしまっているだろう。

漣ちゃんは昨日も大変だったなあ。

「ママとパパに会いたい。二人が心配だ。」

なんて言い出したかと思うと、その目から大粒の涙が流れ出した。

いつもはややつり目がかっているその端正な顔は、涙でボロボロだった。

慰めるのが大変だったよ。

私たちの家族は、ISAF軍が首都への攻撃を開始する数時間前にコトブキ財閥の関係者が保護してくれた。

そしてそのまま中立国へ脱出させてくれることになっている。

どのような手段を使うのかは私にはわからない。

しかし、大国エルジアにおいて最大の規模を誇り、更には国外においても五指に入る大財閥であるコトブキ財閥のコネクションを使えば、民間人を中立国へ脱出させることなどわけないのだろう。

「…そう、わかった。ありがとう斉藤。」

「…ええ、わかった。あなたも気をつけて。」

みんな！

ムギちゃんがこちらに向かって叫んだ。ウェーブのかかったら金髪に近い明るい色のロングヘア。外国の人形のようなその顔には、安堵の色が滲み出ていた

「みんなのご家族は、無事に中立国へ脱出出来たわ。」

「ほ、本当か？ムギ！」

澪ちゃんが隅から叫ぶ。先程の怯えようからは想像もつかないくらいに明るい声だ。

りっちゃんも安心したように胸を撫で下ろした。

「あずにゃんの家族や憂も大丈夫なの？」

私の問いにムギちゃんは「もちろんよ。」

と頷く。

ホッとした私に、ムギちゃんは言いにくそうに「でも…」と呟いた。

「唯ちゃんのお父さんは、まだ行方不明なの。ウイスキー回廊での戦闘に参加したのは確かなんだけど、その後、行方が…」

行方不明

その言葉は、生きている確率が圧倒的に低いことを意味していた。

首都の防衛のため、エルジア軍が持ちうる総ての戦力を投入した最終防衛線ウイスキー回廊での戦車戦。

ISAFは、陸軍の支援のため、空軍を投入し、戦闘を有利に進めた。

その中には、あのリボンの戦闘機も居たらしい。

ストーンヘンジを破壊し、黄色の4を撃墜したあの悪魔。

結果、ISAF軍は戦車戦に勝利を納めた。

空軍は、リボンの戦闘機をはじめとしたISAF軍戦闘機に為す術もなく壊滅した。

たった一年前までユージア大陸の空を支配していた私たちの国は、その支配権を奪われたんだ。

獲物を失ったISAF空軍は、エルジア陸軍に対して機銃掃射を行なったと聞いた。

お父さんの生きている確率が圧倒的に低いことを、皆わかっている。先程とは違う気まずい雰囲気

BGMは砲弾の炸裂音と空を引き裂くエンジンの音。そんな世界を破壊したのは、我が愛しの後輩だった。

「せ、先輩！」

皆が声の方向へ振り向く。

黒髪にツインテールのパイロットが息を切らせながらこちらに向かって走って来ていた。「あ、あずにゃん！聞いてよ！みんなの家族は無事に……」

「そんなことはどうでもいいです！」

家族の無事を伝えようとした私の言葉を打ち切り、彼女、あずにゃんこと「中野梓」は叫んだ。

皆は驚かない。航空予備士官学校に入ってから彼女の彼女がどう変わったかを、皆知っているから。

高校時代の純粋な彼女はもうはもう居ない。

首都中央スタジアムで一緒に演奏しようという目標を語り合った彼女の目には、もう音楽は映らない。

「ジャン・ルイ教官が訓練生達を集合させています。律先輩はB班の班長なのに、何をしてるんですか！同胞達が命懸けで戦っているのに…」

制服の似合う少女はいまや、飛行服を着た曹長になっていた。彼女の瞳には、戦いしか映っていない。

家族の安否よりも、軍の通信を優先した彼女に、私は寂しさを感じた。

第2教導飛行団司令部！

「B班、リツ・タイナカ以下五名、集合しました。」

現在、航空予備士官学校の一室には教導飛行団の司令部が置かれている。

しかし、その司令部内の空気はいつもと違い重苦しい。

通信機からは、市街地で戦う部隊からの航空支援を要求する無線が入る。

それは、悲痛な叫び声にと形容するにふさわしい。

私は悟った。

私たち、出撃するんだ

最早、航空兵を養成する教導飛行団ですら、戦いに投入せねばならないのだ。

それが、どれ程異常なのか、鈍い私でもわかる。

恐らくは皆、感じているのだろう。

教導飛行団長は2日前に首都の最高司令部地下豪に出頭し、不在なため、指揮は予備士官学校長の大佐が執る筈だった。

しかし、窓際大佐の配置としてうってつけである予備士官学校長の地位。

そこに座る大佐は毒にも薬にもならないとの評判であり、有事の際の指揮は執れていなかった。

その他、実際の指揮は教官のジャン・ルイ大尉が執っている。

今、私たちに烈火の如き表情で近づいているのは、予備士官学校長ではなく、ジャン・ルイことジャン・ルイ・フローベル大尉その人だった。

「貴様等、遅いぞ！何をしていた。」
りっちゃんは答えられない。

そりゃそうだ。家族が中立国へ脱出出来たかどうかの確認をしていて遅れたなど言えば、どうなるか分からない。

口ごもるりっちゃんに業を煮やしたジャン・ルイ大尉は「もういい」と言と、私たちに椅子に座るように促した。
私たち五人は空いていたパイプ椅子に座る。

私たちが座るのを確認したジャン・ルイ大尉は先程とは違い、静かに話し始めた。

「現在、首都の制空権は、ISAF軍の手中に収まりつつある。」

それは誰の目にも明らかだった。

格納庫の入り口で空を見上げていたけど、エルジアのラウンデルを付けた飛行機は、殆ど飛んでいなかった。

空を駆け抜けるのは、三つの鏃のシンボルを付けた飛行機ばかり…

私たちには、その現実が堪えた。

大陸の空はストーンヘンジによって打ち砕かれた。

ISAFはその、打ち砕かれた空の欠片を拾い集めた。

そして、かつてストーンヘンジがそうしたように、彼らもまた私たちの空を打ち砕いた。

私たちには、砕かれた空をもとに戻せない。

ソラノカケラは、もう拾い集めることは叶わない。

放課後の音楽室

五人で見た夕焼け空

もうこの空は、私たちの空じゃない。

三つの鏃が空を砕き、リボンの死神が命を奪う。

七つの大砲が支配していた空よりも、もっと危険な空。

いま、それが私たちの上に広がってる。

この空には、大勢の勇者の叫びが、木霊している。

そう思うと、何故か私は体が震えた

.....
...

ジャン・ルイ大尉の口からは、あまり景気の良いことは出なかった。

ISAF上陸軍に艦砲射撃をしていた戦艦が

ISAF海軍に一矢報いんと出撃した駆逐艦が

尽く沈められたこと。

首都の上空制圧を担当していたバリー隊が、壊滅したこと。

戦闘が始まったとき、ジャン・ルイ大尉は、「安心しろ。バリー隊が上空制圧をする。」なんて言ってたけど、それは叶わなかったみたいだ。

さらに絶望的だったのは、友軍と合流を図った戦車隊が、ジョンソン記念橋の崩壊で合流できなくなったことだ。

戦車隊が合流に失敗したことで、私たちの敗北が決定した。

その事實は、私たちに重くのし掛かる。

ジャン・ルイ大尉は、そんな私たちを見回すと、口を開いた。静かに、そして力強い口調で。
それは、未だ諦めを知らない口調だった。

「首都の南方、トゥインクル諸島に、建造中の兵器がある。」

建造中の兵器

皆がその言葉に耳を惹かれた。

私たち五人は勿論、意気消沈し頂垂れていたパイロットも顔を上げた。

「し…新兵器ですか。」

誰かが声をあげる。

それに、ジャン・ルイ大尉は答えた。

「ああ、名はメガリス。」

メガリス

太古の巨石遺跡の名を冠する新兵器は、私たちに微かな希望を持たせた。

「その兵器は、衛星軌道上のユリシーズの破片を落下させる。ストーンヘンジをも上回る、我がエルジアの最終兵器だ。」

淡々と語る口振りに似合わない内容。

衛星軌道上の隕石の破片を落下させるなんて、普通じゃない。

「そのような兵器…一体いつの間に…」

ムギちゃんが至極当然の質問をする。

「かつて、ユージア大陸の諸国を席卷したクーデターがあった。そのクーデター軍は、北方の島国ノースポイントに司令要塞を構えていた。名はイントレランス。」

私たちが生まれる少し前に起きた事件だ。
予備士官学校でも、軍事史として習った。

「わが共和国も、統合軍として鎮圧に参加し、クーデターは鎮圧された。メガリスは、そのイントレランスの技術データを基にして、共和国が新たに作り上げた超兵器だ。」

超兵器

すごい兵器ということは、私にもわかる。
でも…

「あの…」

私は手を挙げる
その途端、皆の目が私に向けられる。

「どうした、ヒラサワ少尉。」

私は、一つの疑問を大尉にぶつけた。

恐らく、これはみんなの疑問。そしてみんなは、この疑問の答えを予想している。

その答えとして相応しい行動は、一つしかないから。

「大尉は何で、私たちにその…メガリスのことを教えたんですか。」

その質問に、大尉は目を細める。

じっと私を見つめた後、「フウ」と息を吐く。

「決まっているだろう。」

そう言い、イスから荒々しく立ち上がる。

「我々は、メガリスを起動させる。」

予想道理の答えが返ってきた。誰も驚かない。皆の視線は相変わらず大尉に集中している。

それを意に介さず、大尉は続ける。

「ユリシーズの破片を落下させる。ISAF軍に、ユリシーズの悪夢を見せてやる。」

ユリシーズ

ユージア大陸に落下し、何万人もの人の命を、私の家族を奪った隕石。

まさか、再びあれの名を聞くなんて……あれが落ちる姿を見る事になるなんて思ってもみなかった。

新聞の中の戦争

テレビの中の戦争

教科書の中の戦争は、もっとスマートで、美しかった。

エースと呼ばれる英雄たちが、青空を駆ける。

ウステイオの鬼神

ベルカ藍色の騎士団

エルジアの黄色中隊。

私の知っている戦いは、もっと綺麗だった。
プライドとプライドがぶつかる騎士の闘い。

まるで映画かおとぎ話のナイトの一騎討ちを見ているかの様に考えていた。

でも、現実はず違った。

地上軍に機銃掃射を行うパイロット。

非戦闘員のいるビルに砲弾を撃ち込む砲兵隊。

遂に隕石まで降らせようなんて…

今、私の前に広がる戦争は醜く、血生臭い殺し合い。

美しさの欠片も無い、ただの殺し合い…

「我々はメガリスを起動させる。1930に全員出発だ。ハーキュリーズを準備しろ。」

1930…

丁度一時間後だ。

僅か一時間後には私たちは格納庫のハーキュリーズの中に詰め込まれる。ギー太は持っていていけないあ、なんて能天気な事を考えられる私はある意味大物なのかもしれない。

「いいか、全員直ちに準備を…」

大尉がそこまで言いかけたとき、本部のドアが開いた。

ふと、私は部屋に掛けられている時計に目をやった。
銀縁の、丸い時計だ。
時計は、1933を示していた。

「申し訳ありません。」

ドアの前に立っていたのは、一人の兵士だった。

顔はかなり焦った様子である。

「大尉、あの…総司令部より士官が到着していますが、その…」

口は吃り、話の内容は要領を得ない。

「一体どうしたんだ。話が要領を得ない。」

「私が代わりにお話するわ。」

兵士を押し退けて、一人の士官が入ってくる。

薄い茶髪のショートカット。

メガネが知的なイメージを醸し出す彼女を、私は知っていた。

否、私だけではない。

桜校軽音部のメンバーは全員知っていた。

りっちゃんも、澪ちゃんも、ムギちゃんもあずにゃんも皆…

「の…和ちゃん！」

私の声が彼女に聞こえたかは分からない。

ただ、視界に写る幼馴染みは声が聞こえていないかのように私を無視した。

「第2教導飛行団総飛行隊長、ジャン・ルイ・フローベル大尉ですね。総司令部付仕官のノドカ・マナベ中尉です。」

私の幼馴染みは、そう言って大尉に敬礼した。

大尉は訝しげに彼女を見つめる。

「総司令部の中尉が態々このような場所までご苦勞ですな。生憎、我々は忙しい。大した用で無いならば、帰っていただけますかな。」

そう言い放つ大尉の目には、敵意にも似た意志が感じられた。それは、前線で血を流す部隊指揮官の大尉と、司令部の要塞で指揮を執る仕官の間にある壁が生み出すものに他ならない。

目の前の二人は、目に見えない分厚い壁で仕切られている。「私は総司令部より命令をお預かりして参りました。」

大尉にそう告げる和ちゃんは、私の知っている和ちゃんでは無かった。

容姿、仕草は昔と何ら変わらない。

只、私の知る彼女はもっと優しく、温かった。

「命令だと。」

大尉の鋭い目が和ちゃんを捉える。

「はい、明日9月20日1200をもって我がエルジア共和国はISAF軍に降伏することが決定しました。」

え…

私は、眼前の幼馴染みの口から発せられた言葉の意味を解らずにい

た。

降伏？

ISAF軍に？

エルジアは、国民はどうなるの？

私たちは？

リボンは…死神はどうなるの？

「それって一体どういうこと。」

私が立ち上がる。

しかし、和ちゃんは私には目もくれず大尉に話し続けた。

「このような結果になり、誠に残念です。しかし、これも国家国民のため。了解して頂けますね。」

「…」

大尉はただ黙ったままだった。

「まで、和。」

突然私の右隣より声がした。りっちゃんだ。

私の隣に座っていたりっちゃんは、立ち上がり和ちゃんを見据える。

皆の視線がりっちゃんに集まる。それは、私が大尉に質問をしたときと同じだった。

和ちゃんは横目にりっちゃんを見て

「何かしら、田井中中尉。」

と冷たく言い放った。

「その命令、本当に総司令部からの命令なのか。」

「ええ、正真正銘本当に総司令部からの命令よ。ほら。」

和ちゃんは鞆より命令文書を取り出す。

そして私たちのところまで近付くと、りっちゃんに命令文書を差し出した。

りっちゃんはそれをむしり取り、それに目を通す。

「…おい。」

りっちゃんが目を細める。

「何かしら。」

「何でこの文書、発令者が総司令官じゃ無くて、参謀次長なんだ。」

「ああ、それね。」

フフ、と下を向き笑うと和ちゃんは顔を上げる。

「高級幕僚達は、大半がヘリで脱出されたわ。総司令官殿も、御婦人と御息女をお迎え次第脱出予定よ。」

和ちゃんの口から出た言葉は、司令部の面々は色めき立った。口々に罵声が発せられる。

「黙りなさい！」

和ちゃんは彼らを一喝すると、再び話始めた。

「高級幕僚達を乗せたヘリは殆どが撃ち落とされたわ。総司令官殿も無事脱出出来るかは分からない。」
皆黙って聞いている。

「参謀次長殿は事後処理のために自ら総司令部に残られた。そしてISAF軍に降伏することを決定したの。」

衝撃的な事実が和ちゃんの口から淡々と語られる。

今まで多数の兵士達を死地に駆り出した指導者達が、今また私たちをスケープゴートにし逃亡を図ったなんて。

しかも、総司令官ですら無事脱出出来るか分からない状況だなんて…

「ああ、それと。」

和ちゃんが思い出したように呟いた。

「第2教導飛行団長殿も、ヘリで脱出を図られたわ。でも、脱出直後に撃墜されたみたいだね。」

皆言葉が出ない。

命を賭けて守り抜く筈の祖国の敗北

信じていた指揮官の敵前逃亡

今まで私たちに積極的攻勢を指示していた軍指導者達が国を、私たちを見捨て逃亡をしたことは、非常にショッキングな事実だった。

りっちゃんは命令文書を手に持ち呆然としている。

「皆わかったかしら。これが現実、今のエルジアの状況よ。それと律、その文書を返して貰うわよ。」

そう言っ て和ちゃんは右手をりっちゃんの持つ命令文書へ伸ばす。

「…!？」

伸ばされた和ちゃんの右手が、ジャン・ルイ大尉の手に掴まれる。

ジャン・ルイ大尉は、いつの間にか私たちの席の近くにいた。

「……その手を放して頂けませんか。」

しかし大尉は手を離そうとしない。

和ちゃんは手を振り払う。

「一体何のおつもりかしら。」

溢れる敵意を隠そうとせず、大尉に向ける和ちゃん。

「私はその文書を返して頂きたいだけなのですが。」

「この文書はまだお返しするわけにはいかん。現在、この隊の最高指揮官は予備士官学校の大佐殿だ。大佐殿に文書をお見せする。」

大佐殿

それを聞き和ちゃんはほくそ笑む。

和ちゃんも大佐の評判は知っているのだろう。

「ええ、よろしいですよ。あの弱腰で、凡庸な昼行灯の大佐殿にお見せしても。」

それを聞き大尉は顔を歪めるが、直ぐにいつもの表示に戻り私たちを見た。

「私は命令文書で大佐殿にお見せしてくる。お前達は準備をしろ。一時間後にここに再度集合だ。ジーン、マナベ中尉を来客室にお連れしろ。」

そう言つて大尉は部屋を出る。そして、それに続くようにジーンの中尉と和ちゃんが退室した。

ジーン中尉は、ジャン・ルイ大尉よりも少し年下の教官だった。その彼に案内されて、和ちゃんは退室していった。

残された皆は各々顔を見合わせた後、次々に退室した。

そして部屋には、私達五人になった。

「...どうする。」

りっちゃんが呟く。

「やっぱり、部屋に行くか。準備もしないと。」

答えたのは澪ちゃんだ。

私たちは特に返事もせず、お互いに顔を見合わせて立ち上がった。予備士官学校舎の横に併設された兵舎。

私たちの部屋は二つに別れてるが、隣同士だ。

「じゃあ皆、必要最低限の物だけを持って集合だ。」

りっちゃんが言い終わつたのを合図に、部屋に入る。

私とムギちゃん、あずにゃんが同じ部屋だった。りっちゃんと澪ちゃんは言うに及ばず、だ。

「何を持っていけばいいのかな。」

そう言いながら机の引き出し、共同で使っているクローゼットの引き出しを漁る。

背囊には救急用具、水、携行食料が入っている。

その中に数枚の衣類を入れる。
ふとムギちゃんを見る。

ムギちゃんは一冊の本を見つめていた。

愛しき薔薇への手紙

ベルカ戦争で戦死した一人のベルカ人エースパイロットが、家族に宛てた日記の内容を纏めた本だ。

この学校に入ってから、ムギちゃんは良くこの本を読んでいた。

…

「この本ね、マンフレート・ネッツァーというパイロットが書いていた日記の内容を纏めた本なのよ。」

訓練の休みの日、皆で来ていた公園のベンチ。

りつちゃんが発した「何なんだ、その本。」という言葉からムギちゃんには自分の読んでいた本の説明をする。

「1995年4月15日、自分が戦死する日まで、彼は自分の妻子に宛てたメッセージを日記に綴っていたの。」

そう言ってムギちゃんは、私に本を手渡す。

私はパラパラとページを捲る。

そこにあっただのは、家族を思ふ父の愛。

大空の戦いに身を投じるパイロットは、地上では一人の父親だった。

「…私ね、マンフレート・ネッツァーの家族が羨ましいの。」

ぽつりとムギちゃんが呟く。

え…と澪ちゃんが驚いた声を出した。

「私の父は、家族を顧みることには無かった。父の頭の中は、会社と…このエルジアの未来だけ！」

普段目にするものの無い、ムギちゃんの怒り。

誰一人として、声を発することが出来ない。

「私は只…家族に目を向けてほしかったの。」

消え入りそうなムギちゃんの呟き。

いつも皆を笑顔にするその唇からは、今日は悲しみの叫びしか出てこない。

「マンフレート・ネッツァーは、自分が死ぬかもしれない環境のなかで、家族を想っていた。」

それはさっきの本を読めばわかる。あの本に書かれていた内容は、家族を想う父の気持ちだ。

「私の父は、彼みたいになんか死ぬとも知れない身の上ではないわ。只イスの上に座り、書類にサインをするだけ。たまに外に向かえば、国家主義者のパーティーで演説…この様な毎日の中で、30分でもいい…何故家族に目を向けてくれないの……」

静かな公園に響くのは、ムギちゃんの啜り泣く声。

誰も声を発しない。

「大丈夫さ」「お父さんはきっとムギちゃんに目を向けてくれる」
なんて無責任な事は言えない。

実の娘を国の盾にするという事を平然と行つ父親。

その娘に、あなたの父親はあなたを愛しています、等と言えるだろうか。

憎らしいほどに晴れ渡っている空。

この公園には、私たちの他は誰も居なかった。

静かな公園には、一人の少女の啜り泣く声しか聞こえない。

私たちは、ムギちゃんが泣くのを只黙って見ているしか無かった。

-
-
-

……

あの時の本

あれから時々、ムギちゃんはその本を読んでいた。

皆に見せる笑顔、しかしその本を読んでいるときは、寂しそうな顔を見せる。

ムギちゃんは、本を読んだときはマンフレート・ネッツァーの家族の一員になった気がするのだろう。

戦地に在って尚家族を想う優しい父。

しかし、現実の父は家族を顧みることには無い冷酷な父。

…ムギちゃんは、マンフレート・ネッツァーの家族に嫉妬してるのかも知れない。

自分の様な境遇の者がいるなかで、父に、夫に愛された幸せな者が

居たことに。

「先輩、準備出来ましたか。」

あずにゃんの声で私は現実に戻される。

気付くとムギちゃんも出発準備を終えていた。

私も慌てて準備を終える。

部屋を出ると、丁度澪ちゃんとりっちゃんも部屋を出ていた。

「まだ、時間があるな。」

りっちゃんが腕の時計を見ながら言う。

「じゃあ、いつものあそこに行きますか。」
とあずにゃん。

いつものあそことは格納庫の事だ。

訓練の合間、私たちはよくそこに集まっていた。

一緒に話をしたり、只空を見上げたり。

今日のような日にも私たちはそこへ集まる。

私たちの居場所はそしか無いのかと、乾いた笑いが込み上げる。

皆の足はそこへ向かう。

私は、ふと後ろを見た。

開け放されたドアの向こうに見える私たちの日常。

軍隊という日常とはかけ離れた世界の中にあつた唯一の日常世界。

私たちは今から、それすら棄てる。

その先に何があるのか

それは分からない。

只、一つ分かることがある。

私たちは

もう戻れない。

格納庫の周辺には、人影は疎らだった。

ライフルを構えた歩哨が周囲を警戒している程度だ。

私たちが格納庫の近くのベンチに腰かけると、その歩哨は顔をしかめる。

しかし、私たちが空軍の予備士官、下士官だと分かると慌てて敬礼した。

相変わらず上空はI S A Fの戦闘機しか飛んでいない。

明日の降伏情報が伝わったのか、市街地の方でも散発的な戦闘音しか聞こえない。

大部分の部隊は投降してしまったのだろうか。

大本営は陥落寸前の筈だ。

と言うことは、市街地より交代する部隊はここ 航空予備士官学校に集結するだろう。

降伏を良しとしない兵士達が、死に場所を求めるために…

私がそんなことを思っていると、ふとりっちゃんが

「なんかさ、あんな歩哨を見てるとき、サンサルバシオンを思い出すよなあ。」

と言い空を見上げた。

「サンサルバシオン…ですか。」

あずにゃんが遠い目をする。

ほんの数カ月前なのに、私たちには何年も前の話のようだ。

大陸戦争初期に、私たちの国に蹂躪された中立国家サンサルバシオン。

この戦争の引き金となった兵器『ストーンヘンジ』を自国内に保有していた国家。

私たちは、そこに居たのだ。

…

2005年1月

ISAF軍が大陸に進行してきた事で軍部が大騒ぎしているなか、私たち予備士官はサンサルバシオンのサンプロフェッタ空港に降り立った。

目的は、サンプロフェッタ空港に居を構える空軍での実施研修であったが、私たちにすれば大陸交通の要であるサンサルバシオンに旅行に来たような気分だった。

それがいけなかった。

予備士官らは初日は説明を終えた後は自由時間となっていた。私たち5人はその自由時間中に市街地に出て、道に迷った。

占領下とはいえ、馴れない土地である。

たまに立っている強面の武装憲兵に道を聞くのも躊躇われた私たちは、市街地を闇雲に歩き回り時間を浪費していった。

「おい、もう点呼の時間じゃないのか。」

漣ちゃんが泣きそうな声で言う。

「もう20時よ…とつくに過ぎてるわね。」

ムギちゃんが腕時計を見ながら苦笑いする。

点呼の時間は19:30だからもう過ぎている。

「かといってこれ以上遅れるのもなあ…どうする、唯。」

りっちゃんの言葉だ。流石にいつものお気楽さは感じない。

「ねえ、あのお店で聞いてみようか。」

私は目に付いた一件の店を指差す。

洒落た店だ。見た感じ、カフェだろうか、と思ってみると看板には
C A F E P U B & a m p ; R E S T A U R A N T S K Y K I
D と書いてある。

「あんまりああいいう店には入りたくないけど、仕方無いか。」

漣ちゃんはあまり乗り気では無さそうだが、この際仕方無いかと言う感じだ。

「私、夜のパブに入るのが夢だったの。」

ムギちゃんは少々変わった自分の夢を語った。

「まあ兎に角行きましょう。これ以上遅れると、大変な事になりますよ。」

そう言ったあずにゃんはピリピリしていた。

生真面目な彼女は先程からかなりイライラしている。

まあ、普段より教官らに目を付けられている私たちの中で彼女は成績が良かった。

そんな彼女からしてみれば、今回の遅刻で自分の評価が下がるのは面白くないのだろう。

私たちは彼女に促され、急ぎ足でその店 スカイキッド に向かった。

「いらつしゃいませ。」

この店主だろうか。

中年の男性が私たちに声をかける。

「ほお…女の子が士官とは。珍しいな。」

その男性は、私たちを物珍しそうに見つめる。

そして

「ようこそ、スカイキッドへ。ご注文は。」
と。

とても道を訊きに来たとは言にくい。

澪ちゃんが私の背中を突く。

私が訊けという意味か。

そんな男性に見えない範囲でのやり取りをしていると、業を煮やした者が一人いた。

あずにゃんだ。

そして、彼女は私たちより一歩前に出、言い放つ。

「私たちはここに食事をしに来たのではありません。」

店主らしき男性は困惑の表情を浮かべる。

その後、何か覚悟をしたような顔をする。

しかし、あずにゃんはそれに構わずに口を開く。

「私たちは訳在ってサンプロフェッタ空港に向かっているのですが、この土地に不馴れであり、道に迷いました。その為、私たちをサンプロフェッタ空港まで案内して頂きたい。」

と。

店主らしき男性はそれを聞き何故か安心したような表情を見せた。それは、よく顔を見なければ分からないような些細な変化だ。

「はあ…そうですね。しかし、サンプロフェッタ空港までは歩いて一時間半はかかります。わたしも店のことがありますので…良ければ、地図をお渡ししますが。」

と言う。

「じゃあ…仕方無いか。皆、地図を貰って…」

りっちゃんがそこまで言いかけたとき、それは遮られた。

あずにゃんだ。

「何を言ってるんですか。被占領民の分際で。」

それを聞き、店主らしき男性ね表情が強張る。

「貴方は自分の立場が分かっているのですか。我々に協力することは、貴方達サンサルバシオン国民の義務です。」

それに、歩いて時間がかかるならば、車を使えば良いじゃないですか。」

その口から出てきた言葉。

それは、占領国の軍人の言葉。

戦争が起こらなければ、一生他人に言い放つ事は無いであろう言葉。

それを彼女は、何の躊躇いもなく言い放った。

あずにゃんと店の店主らしき男性が揉めている。

あずにゃんは車を出せと言い、男性はガソリンが無いと言い張った。

あずにゃんからすれば、高圧的な態度で臨んだ分後に引けないのだろつ。

りっちゃんや澪ちゃんはあずにゃんを宥めており、ムギちゃんは少しオロオロしている。

店の厨房からは、ウエイトレスと料理人らしき男女が此方へ小走りで駆けてきた。

ああ

ややこしいことになりそうだ。

私は頭を抱えなくなった。

ふと、店の奥　二回へ続く階段の方を見ると、一人の女の子と目があつた。

金髪の、年の頃はあずにゃんより少し下か。

少しキツイ目をした、しかし本来は優しそうな顔だった。

彼女はこちらを少し見つめると、二回へ上がった。

そのとき、店の外で車が止まる音がした。

近所の人間が、憲兵隊に通報したのか

面倒くさいことになる、と思い身構えるが、入ってきたのは一人の女性だった。

「…え。」

私は、その女性を見て驚いた。

後にも先にもここまで驚くことは無いだろう。

厳密にはこれより数カ月後、ファーマンティにて変わってしまった幼馴染みに再開し、かなり驚くことになるのだが。

とにかく私は驚いた。

「まあ…」

ムギちゃんなんて目を白黒させている。

漣ちゃんとりっちゃんは声さえ出せないのだろうか。

あずにゃんは暫くは気付かずに口論を続けていたが、こちらを見てビックリしていた。

「さ…さわ子先生、な…なんで。」

さわちゃんこと山中さわ子。

私たちの恩師であり軽音楽部の顧問であつた彼女は今、軍服に身を包み、私たちの前に立っていた。

「ちょっと皆、人の行き付けの店で喧嘩なんて止してよね。」

そう言つてイタズラげに笑う。

軍服には鷲座の部隊章。

その笑顔は、私たちにいつも見せていた笑顔であり、軍服には到底似合わぬ笑顔だった。

私たちが予期せぬ恩師との再開を驚いていると、店主らしき男性はさわちゃんに助けを求める。

「あ…貴方達ですか。ちょっと！助けて下さい。」

それと同時に店のドアが再び開く。

二、三人の男が入ってきた。

「黄色の4、何か揉め事ですか。」

恰幅の良い中年の准尉だ。黄色の4とはさわちゃんのコールサインだろうか。

「ええ、予備士官学校の予備士官が少しおイタしてたのよ。」
それを聞き、男らはこちらを睨む。

「怒らないであげて。私の生徒なのよ。」
とさわちゃん。

そして、その場はさわちゃんらの取り成しもあって何とか収まった。
サンプロフェッタ空港のジャン・ルイ大尉にも、あの中年准尉が連絡をしてくれることになった。

「うちの隊は良くここで飲むのよ。サンプロフェッタ空港から迎えが来るまで付き合いなさい。」
と言われ、私たちも一緒にいることになった。

あずにゃんは少し不貞腐れている。

やはり揉めてしまった手前居づらいのか。

店のイスに座る。

店の中に続けて七、八人入ってくる。

その中には、十二、三歳だろうか。男の子の姿があった。

他の隊員と同じく揃いの上着を来ている。

私はりっちゃんたちを見た。皆不思議そうな顔をしている。

そして最後の男が入るとき、あの中年准尉が突然大声で言った。

「さあ、我らが」

このサンサルバシオンで

「アクイラ隊隊長」

私たちは彼と出会った。

「黄色の13。」

そして他の隊員から喚声が上がる。

さわちゃんを見ると、こちらを見てウィンクした後、彼を見て拍手した。

彼 黄色の13

これが、私たちと彼との初めての出会いだった。

黄色の13は店に入ると私たちの方を見た。
そして

「黄色の4、その子達は。」
と、さわちゃんに問う。

その目は冷たく、鋭い。

「私が教師をしてたときの生徒よ。この店でちょっとおイタしてたから懲らしめたのよ。」

そう言つてさわちゃんは笑う。

しかし黄色の13に向けたその笑顔は、私たちに向けるのとはまた違う笑顔だった。

「サンプロフェッタ空港から、ジャン・ルイっていう大尉が迎えに来るらしいからそれまで一緒に居させてあげてね。」

そう言つとさわちゃんは私たちに向かって小声で

「教官さん、だいぶキテたわよ。」

と囁いた。

私たちはそれを聞き、苦笑いをする。

ああ、またどやされるのか
と皆思つたに違いない。

彼女はそれを見て悪戯げに笑う。
かつて部室で見せていた、少し子供染みた笑顔で

「さあ、始めるか。」

中年准尉の声と共に、そこに居た兵士達が歓声をあげる。
私たちは座っている席から、何が始まるのか只見ている。

すると中年准尉が各々のコールサインと撃墜数を読み上げていく。

どうやらこの中隊は今日空戦を行なったらしく、これは各々の戦果
発表の様だ。

そのとき、りっちゃんが

「この部隊のコールサインって黄色の何々って言うんだな。」
と誰に言うまでもなく呟いた。

「…黄色、か。」

と澪ちゃんもそれに続く。
そして澪ちゃんの表情が変わる。

「な…なあ、黄色ってさ…もしかして。」

何時に無く焦る様子に、皆が澪ちゃんを見る。

「この部隊ってさ、あの 黄色中隊 じゃないのか。」

それを聞き、皆の表情は驚きに変わる。
無論、私も。

「ま…マジかよ。」

りっちゃんは信じられないといった様子だ。

「じゃあ澪ちゃんは、さわ子先生が黄色中隊の隊員だっていうの。」
ムギちゃんも驚きの表情を浮かべる。
しかし、それは無理もないこと。

黄色中隊

正式名称は第156戦術戦闘航空団アキラ隊

ストーンヘンジを防衛する中央ユージア条約機構指揮下のSTN警備飛行隊との戦闘や、ストーンヘンジ爆撃を敢行したISAF空軍との空戦で名声を得た精鋭部隊。

予備士官学校の授業でも何回も聞いた名前。

軍事大国エルジアの象徴。

その部隊にさわちゃんがいるなんて、いかに私でも信用できない。

「でも先輩、あの部隊章を見てください。」
あずにゃんがそう言って、黄色の13の隣に席を移したさわちゃんを指差す。

「部隊章に描かれてる鷲座に五つの機体のマーク。あれはアクィラ隊：別名黄色中隊のエンブレムですよ。」

あずにゃんがそこまで言ったとき、一際大きな歓声があがり、パイロットの一人が頭からビールをかけられた。どうやら撃墜数が通算五機に達し、他のパイロットから祝杯とやつかみを浴びせられているらしい。

そして、中年准尉が再び読み上げる。

「そして我らが隊長黄色の13は 撃墜4、通算撃墜数は72。」

「

その瞬間、他の隊員が歓声を上げた。

店内はお祭り騒ぎというに相応しい。

そして、りっちゃんが

「…間違い無い、な。」

と言うと皆は頷いた。

今、私の目の前に居るのは、紛れもないエルジアの英雄的存在のイス。

彼が率いる最強の中隊。

そして、教師から戦闘機パイロットへと転身を果たした我が恩師だった。

何だか、さわちゃんが遠くに行ってしまったみたいだ。

私たちが只黙ってさわちゃんを見つめていると、突然目の前に飲み物が置かれた。

見ると、先ほどの金髪の女の子だった。

「紅茶でいい？」

「…へ。」

彼女の質問に、私は間抜けな返事をする。

「お酒、飲めないでしょ。」

そう言っただけで彼女は、私たちの前に人数分のティーカップを置くと、さっさと引込んでしまった。

「…ダーズリンね。」

ムギちゃんがそう呟く。

「水色が明るくて、紅茶の中でも特に香りを重視されるのよ。」

彼女はそう言っただけで一口飲んだ。私もそれに続く。
ダーズリンの香りが口の中に広がる。

頭の中を駆け巡る記憶。

皆と音楽室で紅茶を飲んだ。

ケーキも食べた。

練習をした。

文化祭ではライブもした。

軽音部の思い出。

戦争が無ければ続く筈の毎日。
変わることの無い平凡で、しかし輝いていた私たちの毎日は、スト
ーンヘンジによって打ち砕かれた空のように儚く散っていった。

私が紅茶を飲みながら、感傷に浸っていると店のドアが勢い良く開
く。

誰かは知らないが、ドアを少しは労ってくれよ

店主の顔にはそのような表情が浮かぶ。

しかし、店に入ってきた男の顔を見た私たちは、酷使されるドアを
気にかける余裕など無かった。

店に入ってきたのは、阿修羅の如き表情をしたジャン・ルイ大尉だったからだ。

「貴様ら、何をしておるか！」

ジャン・ルイ大尉が叫んだ瞬間、店内は水を打ったように静かになった。

それはまるで時間が止まったかのようだ。

ジャン・ルイ大尉は私たちのところに近付いてくる。

さわちゃんが、大尉はだいぶキテたと言っていたが、これはキテるところの騒ぎではない。

恐らく私たちの顔は今、真っ青に成っていることだろう。

しかし、ジャン・ルイ大尉の歩みは私たちの少し前で止まる。大尉の進路を、さわちゃんが塞ぐようにして立っている。

「お迎えご苦労様です。アクィラ隊のサワコ・ヤマナカです。」

「…うちの予備士官がご迷惑をおかけしました。第2教導飛行団のジャン・ルイ・フローベルです。」

そう言ってジャン・ルイ大尉は頭を下げる。

さわちゃんは横目で顔面蒼白の私たちを見る。

そして、大尉に対して

「あの子達を怒らないであげてね。私たちが引き止めてたのよ。」
と言い「ね、」、とさわちゃんは黄色の13を見る。

大尉は黄色の13を見た。

当の黄色の13はこちらを見ること無く、ビールを口に運んでいる。

「いや、怒るつもりはありませんよ。」

と言った。

フフ、と口元は笑っているが、目元は笑っていなかった。

そして

「お久しぶりです、ボス。」

と言う。

黄色の13は只腕を組み、下を向いている。

大尉の顔を見てはいないが、

「…久しぶりだな、ジャン・ルイ生徒。アグレッサー部隊以来だな
…元気にしていたか。」

と声を発した。

それを聞き、ジャン・ルイ大尉は「ええ。」と一言返した。

只それだけ

それだけの会話だった。

それだけを言い終わると、ジャン・ルイ大尉は私たちの方を向いて

「帰るぞ。」

と言った。

それを聞き、私たちは慌てて立ち上がる。

そのとき、澪ちゃんが思い出したように

「あ…お金払わないと」

それを言えるだけ、彼女は占領国の軍人に成りきれて居なかった。

柄の悪い軍人ならば、自らの立場を盾に代金を踏み倒すという事もいとわないと聞いたことがあった。

残念なことに、当時エルジア軍のサンサルバシオン駐留軍のなかにもそういった輩が少なからず居たことが、サンサルバシオン国民の反エルジア感情を高ぶらせていく要因の1つだった。

「ああ、いいわよ。私が出しとくわ。」

突然のさわちゃんの申し出。

生真面目な澪ちゃんは当然反対する。

その横でりっちゃんが少し残念そうな顔をしたのは私の見間違いだろう。

「良いわよ、たまには先生らしい事くらいさせなさい。」

そう言って私たちを店の外に押し出す。

店の外には、ジャン・ルイ大尉が車にもたれ掛かるようにして待っていた。

その車のすぐ後ろにも、同じ型の車が停まっている。

運転席側のドアが開くと、教官のジーン中尉が降りてきた。

「ヒラサワ少尉、ナカノ曹長は大尉の車に。残りは俺の車だ。」
そうジーン中尉に促され、私たちは二組に別れて車に乗る。

ああ、空港につくまでどやされるのかな…いや、空港に着いてもきつと…

と、空港に着くまでの魔のドライブに私がブルーになっていると、あずにゃんが私の肩を叩く。

「さわ子先生が教官と何か話してますよ。」

そう言われて車の窓から見てみると、確かにさわちゃんがジャン・ルイ大尉とジーン中尉に何か言っていた。

ジーン中尉は何やら困り果てた顔をしており、ジャン・ルイ大尉は始終顔をしかめていた。

その後も何かやり取りをし、さわちゃんは私たちに手を振りながら店に戻っていった。

私たちもさわちゃんに手を振り返す。

そのとき、車の運転席側のドアが勢い良く開き、ジャン・ルイ大尉が不機嫌そうに乗り込んだ。

「あ…あの、大尉。」

ジャン・ルイ大尉はまるで私の声など聞こえぬかのようにエンジンをかけ、車を走らす。

後方のジーン中尉の車もそれに続く。

車はサンサルバシオン市街地を駆ける。

昼間の賑やかさが嘘のように静まり返った市街地は、一人一人歩いている。

そんな市街地に合わせるかのように車内も静まり返っていた。

大尉は只只車を運転し、私とあずにゃんは只前を見つめる。

そんな状況で、車は一体何分走っただろうか。

最も、私には何時間も走ったように感じたが

ジャン・ルイ大尉が、この静けさを破った。

「…明日1230に、アクイラ隊より迎えが来る。」

あずにゃんと私は、ジャン・ルイ大尉の言葉に耳を傾ける。

「お前ら五人を、基地に招待したいとの申し出があった。」

私は、一瞬理解できなかった。

しかし、内容を理解するにつれて、疑問が浮かんできた。

最も、私とその疑問を口にするのではなく、私の隣に座るあずにゃんがそれを代弁してくれたのだが。

「あの…大尉、なぜ私達がアクイラ隊に招待など…」

「俺に聞くな。あの男の考えることはさっぱりわからん。」

そう言い捨てるジャン・ルイ大尉はかなり不機嫌そうだ。車のスピードは段々上がっていき、運転も荒くなる。

後方のジーン中尉の車が段々引き離されていく。

「お前らが基地に行くも行かんも勝手だ。」

バックミラーに映るジャン・ルイ大尉の目は、チラチラと私たちを見る。

「…だが、一つ言っておく。」

車の前方に武装憲兵隊の検問所が見えた。
憲兵が灯火信号で車に止まれの合図を掲げる。

「…あの男に、あまり感化され過ぎるなよ。」

え

と、という言葉が私の口から思わず飛び出た。

それに合わせて車が検問所で止まる。

ジャン・ルイ大尉が武装憲兵と何やら話している中、私とあずにゃんは顔を見合わせた。

「…どういう意味でしょう、先輩。」

私に聞かれてもわかる筈がない。

私は首を横に振る。

私達が検問所の前に停まっていると、ジーン中尉の車が漸く追いついてきた。

車よりジーン中尉が降りてきて、ジャン・ルイ大尉と共に武装憲兵と話をしている。

どうやらスピードの出しすぎらしく、武装憲兵が折れたようで車は検問所を通過した。

「あの、大尉。さっきの言葉はどういう意味m…」

あずにゃんの言葉を遮るようにジャン・ルイ大尉は「何も聞くな。」と言った。

「そのままの意味だ。」

そして

「空港が見えたぞ。」

と。

車の前方に、暗闇に光るサンプロフェッタ空港の管制塔が見える。

サンサルバシオンに鎮座する空軍の本拠地であり、私達若鷲の巢。車の時計のデジタル画面はもうすぐ日付が変わる時刻を表示している。

車はそのまま空港のゲートに向かう。

寒空の下ゲートに立つ歩哨に大尉は何やら伝えようと、歩哨がゲートを開けた。

月明かりに照らされながら、車はゲートを潜り抜ける。

後部座席に乗っている私たちに歩哨が敬礼する。

それを受礼した私は、寒空の下寝ずの番をする歩哨の身体を案じてやるでもなく、只

今日は大変だったなあ

何て呑気なことを思っていた。

翌日、私たちは黄色中隊の中年准尉、さわちゃんの二人が運転するジープに揺られていた。

「唯ちゃん、りっちゃん。なんで貴女たちそんなバテてんのよ。」

私とりっちゃんを乗せてるさわちゃんは、少し心配気味だ。

最も、私とりっちゃんだけじゃなく、残りの三人もバテバテなのだが。

「だって…なあ、唯。」

りっちゃんは精気の抜けた目で私を見る。

それに対し私は力無く頷いた。

話は簡単、私たちは昨日の件に対する懲罰を喰らったのだ。

他の皆が起きる前から訓練がスタートし、朝食は抜きと言う特別コースだった。

担当したジーン中尉も寝不足らしく、訓練中は何度も間抜けな顔で欠伸をしていた。

そんなに眠いならしなきゃ良いのに

と思ったのは私だけではない筈だが、それを口にする猛者は居なかった。

りっちゃんが、ジーン中尉が欠伸をする度にクスクスと笑い、どやされてはいたが…

黄色中隊より迎えが来る前に昼食とシャワーは済ませたものの、疲

労感はん端無い。

疲れた私たちにすれば昨晚のジャン・ルイ大尉の荒っぽい運転に対して、さわちゃんの落ち着いたら運転は心地よい子守唄のようなものに感じた。

「まあ何があつたかは知らないけど、お疲れさま。」

さわちゃんはそう言って笑う。

彼女は勘が鋭い。

軽音部でもそれは発揮されていた。何があつたか知らない、なんて言ってるけど、大方察しはついてるんだろう。

そういえば、私に変装した憂を見抜いたとかいってたなあ…

私が高校二年生の時のことだ。文化祭の直前に私は熱を出して学校を休むことになった。

そんなとき、一つ下の妹の憂は私に変装しライブの練習に参加したらしい。

軽音部のメンバーさえ見抜けなかった憂の完璧な変装を、さわちゃんは見抜いたというのだ。しかも、胸の大きさで。

全く、さわちゃんらしいよね。

眠気で上手く回らない頭でそんなことを考えていたとき

「さあ、着いたわよ。」

そう言って車が止められる。

町外れにある建設途中の高速道路を利用した野戦滑走路。

そこに大型のキャンピングトレーラーや、通信車両が居並ぶ。

エルジアの守護神にしては少々お粗末な拠点が、彼らの住処だった。

眠気でフラフラとしながらも私とりっちゃんは車から降りる。

おい、と呼ばれ、その方向を見ると澪ちゃんらが中年准尉に連れられてこっちに来ていた。

どうやら澪ちゃんらも眠気は全くとれていないらしく、少しフラフラとしている様だ。

そして、私達は二人に一台のキャンピングトレーラーまで案内される。

「ここが彼の住居よ。」

彼とは黄色の13のことか。

さわちゃんがキャンピングトレーラーのドアに手をかけ様としたとき、ひとり若い下士官が出てきた。

「あ…黄色の4。」

「あら、彼は居るかしら。」

さわちゃんの問いに、その下士官は少し困惑した様子を見せる。

「ええ、只…来客が居りますが。」

歯切れの悪い返事だ。

それを聞いたりっちゃんが

「あんな返事の仕方、ジャン・ルイ大尉が聞いたらぶっ飛ばされるぞ。」

笑いを殺しながら私にそう囁く。

「来客…」

その返事を聞いた中年准尉が少し考える素振りを見せる。
ジャン・ルイ大尉の様に、歯切れの悪い返事をした相手を殴り飛ばしはしなかった。

「そのお客はどんな人なの。」

さわちゃんもだ。

いつもと違い多少難しい顔をしているものの、その変化は良く見ないと分からない。

中年准尉や若い下士官がその変化を読み取ったかどうかはわからないが、少なくとも私たち軽音部のメンバーはそれに気付いた筈だ。

「は…何でも昔の知り合いとか。」

態々基地にまで訪ねてくるなんて、余程親しい友人だろうか。でも、私は気になっていた。

何で、来客程度でここまで難しい顔をするんだろう

「名前は何と言っていた。」

中年准尉が聞く。

「名前は…確かアシュレイ…アシュレイ・ベルニッツとか。」

アシュレイ・ベルニッツ

その名を聞いた瞬間、さわちゃんが表示が強張る。

「アシュレイ・ベルニッツ…本当にそう言ったの。」

はい、と若い下士官は返事をする。

それを聞くやさわちゃんはキャンピングトレーラーの中に駆け込んだ。

中年准尉もその後続く。

若い下士官はそれを見て暫く啞然としていたが、ふと、我に戻ったのか。

慌てて二人を追い、キャンピングトレーラーの中に入っていった。

自然、私たちはその場に取り残された形になった。

「…どうする。」

漑ちゃんは私を見る。

困ったときはいつも私かりっちゃんだ。

優等生タイプの漑ちゃんは、こういった時は誰かに判断を委ねることが多い。

「なあ。黄色の13に来てる客ってさ、どんな人が見たくないか。」

りっちゃんは興味深々といった様子だ。

「でも…さっきのさわ子先生の様子、気になるわね。」

とムギちゃん。

私も引つかかった。

さわちゃんのあの慌て様は普通じゃ無かった。

「なあ、なんか気になるよな」

と言っやりっちゃんは、キャンピングトレーラーのドアに耳を当てる。

「え…何してるんだよ、律。」

「馬鹿、聞こえないだろ。漑。」

りっちゃんは口到人差し指を当てて「しー」というポーズをする。
それを見たムギちゃんも、りっちゃんの様にドアに耳を当てる。

「私、人の会話を盗み聞きするのが夢だったの。」

「おい、唯はどうするんだ。」

りっちゃんは私を見る。

私も、ムギちゃんやりっちゃんの様にキャンピングトレーラーのドアに近づいた。

私のその姿を見たからかどうかは分からないが、零ちゃんとあずにやんもドアに近付き、向こうで行われる会話を耳で捉える体勢になった。

「うぶぶ、やっぱり零ちゃんも気になるんでちゅね。」

「う…うるさい、馬鹿律。」

いつも部室で行われていたやり取り。
しかし、それを見ても誰も笑わない。

私の手を介して、アルミの独特の冷たさが伝わってくる。

それと同時に、ドアの向こうからつつすらと会話が聞こえてきた。

ア…レイ…そんな…に…しない。ベルカの…には…い

クリン…ン、ミヒヤエルも参加したんだ。ケラー…ミーの同期
だろう。…直せ。

お前たち灰色の…ちは道を誤った。ベルカは鬼神に負けたんだ、
あの戦争で。

鬼神に負けて…、俺達はオーシアに敗れたんだ。ベルカは必
ず甦らせる。

…

所々聞こえない部分もあったが、段々と聞き取れるようになってき
た。ドアの向こうの声が、段々とボリュームを上げている。

「…一体、何の話をしてんだ。」

りっちゃんの問いに、誰も答えない。

只、首を横に振るばかり。

あずにゃんに至っては

「そんなこと分かりませんよ。」

と言葉を返す。

「でも…さっきから出くるベルカって、あのベルカ公国のことよね。」

「

ムギちゃんが誰に言うでもなくそう呟く。

ベルカ公国

嘗ての雄武国家

強大な空軍を有し、

隣国ウステイオ共和国に攻め行った国

時代の変化を見極めきれなかった、古き時代の国

その末路は皆知っている。

自国で核を使用する暴挙に出、自壊した。

今は領土の大半を失い、一小国に転落している悲劇の国。

「…そのベルカが、黄色の13と何か関係があるの。」

その私の問いに誰が答えれるというのか。

しかし、クエスチョンマークが頭を駆け巡る私には、その疑問を口に出さずに置くことは出来なかった。

そのとき、不意にドアの向こう側で足音がしたかと思うと、ドアが勢い良く開かれた。

ドアに体を任せていた私たちは、それが開かれたことにより一気に倒れこむ。

「おやおや、エルジアはこんな少女達も軍に入隊させているのか。」

その声に、私は上を向く。

視線の先には、一人の男が立っていた。

短髪でつり上がった目をした壮年の男性。

彼は私たちを見下ろし、小馬鹿にしたように笑った。

この声……この人が、アシュレイ・ベルニッツか。

アシュレイ・ベルニッツは小馬鹿にしたような下卑た笑みを止め、黄色の13の方へ顔を向けた。その表情は先程の下卑た笑みを浮かべていた時とは違い、そのつり上がった目を更につり上げていた。

「クリンスマン、見てみる……この少女達を。」

クリンスマン

アシュレイ・ベルニッツの口から出た聞き慣れない名前。

それは、黄色の13に向けられた。

「この少女達は、戦争が無ければ青春を謳歌することが出来た……
そうだろう。」

青春

私達が予備士官学校に進んだときに捨てたもの。

あの、きらきらと光輝いていた毎日の中に確かに存在していたそれ

「エルジアはもう終わりだぞ。俺と来い、クリンスマン。

ベルカを再興させれば、お前は鬼神を忘れることが出来るんだ。」

捲し立てるように喋るアシュレイ・ベルニッツ。

その言葉に、黄色の13は笑う。

心底可笑しいと言うように、只笑う。

それを見たアシュレイ・ベルニッツは　いや、彼だけではない。

さわちゃんも、中年准尉も、あの若い下士官も。

私たちも、その光景を只見ているしかなかった。

「何が可笑的い…クリンスマン。」

「…アシュレイ。確かに俺はあの日から、鬼神の幻想を追いかけてきた。」

静かに、しかし威厳ある声。

これが、黄色の13

これが、黄色中隊の隊長

「だが、俺は見た。鬼神の面影を持つパイロットを。コモナ島の空で、奴の影を見たんだ。」

「馬鹿を言うな。」

それは、あの鬼神じゃ無い。」

黄色の13の口から出る 鬼神 のフレーズ。
アシュレイ・ベルニッツはそれを必死に否定する。

そのフレーズに何の意味があるのか。

私たちには分からない。

だが、二人には何かしらの因縁がある。

それだけは感じられた。

「クリンスマン、考えてみる。少女を戦場に駆り立てる国家に、守るべきものはあるのか……この国は、お前が命を賭けて守るに相応

しい国なのか。」

アシュレイ・ベルニッツの問いに、黄色の13はほくそ笑む。そして

「……違うさ。」

と。

「エルジアを守るために戦うんじゃない。俺は一人のパイロットとして、空で出会った好敵手と戦うんだ。」

アシュレイ・ベルニッツにそう言い放つ黄色の13。
その目には、強い決意が秘められていた。

「…それが、お前の闘う理由か、クリンスマン。」

それを聞いたアシュレイ・ベルニッツは、神妙な面持ちで呟く。

黄色の13は ああ と言った。

「そうか。」

そう言い捨てるとアシュレイ・ベルニッツは黄色の13に背を向け

「なら、エルジアと一緒に死ぬが良い。もう二度と会うことも無いだろう。」

と言いながら後ろ手に手を振る。

そして私たちを見て

「生き延びるよ、無駄に死ぬことは、何の意味も無い。」
と。

いきなりの言葉に、私たちは驚いた。

先程までと違い優しい語気に表情。此が同じ人とは思えない程の豹変ぶりだった。

「え、あ…はい。」

辿々しく返事をするりっちゃんを見てアシュレイ・ベルニッツは笑い、じゃあなと言いついていこうとする。

その時だった。

「おい、アシュレイ。」

黄色の13がアシュレイ・ベルニッツを呼ぶ。

そして

「じゃあな、戦友……死ぬなよ。」

と一言。

たった一言だった。

それを聞いたアシュレイ・ベルニッツはフツと笑う。

そして

「ああ。」

と言い、キャンピングトレーラーを後にした。

えーすのかこー！

…

「そつか…そんなこともあったな。」

りっちゃんはそう言いながら立ち上がる。

その瞳は、黒煙の上がる市街地を見つめている。

あの黒煙の中に、私たちの母校もある。

女子高には凡そ似つかわしくない高射砲が屋上に設置され、校門付近に速射砲が置かれた我が母校。

きつと…学校も爆撃で無くなってしまったんだろう。

「あの人…今はどうしてるんだろうな。」

「…零先輩、今は他人の心配なんてしてる時じゃ無いですよ。」

「……」

あずにゃんにそう言われて澪ちゃんは黙ってしまった。

生きているか死んでいるかも分からない。

もともと、彼は幽霊の様な存在だったのかも知れない。

だが、彼は私たちの前に確かに居た。

あの強い決意を持つて、今も何処かで戦って居るのだろうか。
祖国ベルカのために

それが彼の戦う理由だから。

「丁度良い時間かな。行こうぜ。」

その言葉に皆が立ち上がる。

それに続き私も慌てて立ち上がる。

そのとき、私の目に入った光景。

真っ赤に染まる首都の空

夕焼け空は、まるで血のように紅い。
大空に散っていった幾多のパイロット。

いつもの澄んだ蒼い空は、その血を吸った様だった。

「貴女達…ここに居たんだ。」

不意に後方から声がする。
皆が振り向くと、そこには彼女が居た。

私の大事な幼馴染み。
私の親友。

「和…ちゃん。」

私の声など聞こえぬかの様に微動だにしない。

その冷たい眼差しを私たちに向け、

「貴女達…トウインクル諸島に行くみたいね。」

と言いながら近づいてくる。

何かを覚悟したような強い目に、私たちは圧倒される。

漣ちゃんなんて、りっちゃんの後ろに隠れる様にして立っている。

「和、知ってたのか。」

りっちゃんは一步前に出てそう言う。

「ええ、あのジーンとかいう中尉に聞いたわ。びっくりしたわよ。」
口元は笑っている。

しかし、眼鏡の奥の目は笑っていない。

その顔は、冷徹な仮面を付けているかの様だった。

そして

「駄目よ…絶対に行かせないわ。」

そう言いながら和ちゃんが私たちに向けたもの。

それは、余りにも見慣れたものだ。しかし、軍隊に入らなければ一生縁の無い代物。

人に向けることも、向けられる事も無いだろう。

それを和ちゃんは私たちに向けた。

夕陽の紅い光を浴びて、黒く光るピストルを

「貴女達を行かせはしないわ。行っても死ぬだけよ。」

ピストルを持つ手が微かに震えている。

「姫子もエリも信代も…皆死んだ。」和ちゃんの頬を大粒の涙が伝う。

「貴女達まで…死なせる訳にはいかないのよ!」

張り裂けんばかりの声。

それが、不気味なほどに静かな辺りに木霊する。

「私は貴女達を死なせはしない……例え罵られようと、後ろ指指されても良いわ。これは…私の戦いのよ。」

そう言ったところで、和ちゃんは下を向く。

あの冷徹な仮面は剥がれ落ちた。

その下にあったのは、私たちを死なせんとする優しさだった。

その気持ちは嬉しい。

映画なら、ここで私は涙を流して彼女と抱き合うのだろう。

優しい友との友情を感じながら。

しかし、私は涙など流さない。

今の私にとって、彼女の優しさは

邪魔だから。

「…和ちゃん。」

私たちは彼女に近づく。

皆は驚き、止めようとするが私はお構い無しだ。

「ゆ…唯、動かないで。撃つわよ。」

声を震わせながら和ちゃんは私に警告する。

震える手でピストルを構えているため、銃口は上下に揺れている。
あんなのじゃ、当てることも出来やしないだろう。

「和ちゃん、そこを退いて。私たちは、行かなきゃいけないの。」

和ちゃんの前に立ち、そう告げる。

そう、私たちは行かなきゃいけない。

あの日の約束を

私たちの誓いを果たすため

リボンを落とすという目的のために

行かなきゃいけないんだ。

「唯…何だよ。何で戦うの。もう終わったのよ、何もかも。」

そう言いながら和ちゃんは少しずつ後退り、私との距離をとる。ピストルは相変わらず私に向けながら。

「まだ終わってないよ。」

そう言って一歩進もうとしたとき、乾いた音が辺りに響く。

私の足元のコンクリートが小さく碎かれる。

「動かないでって言ったでしょ。」

銃声が聞こえたのか、先程より姿の見えなかったあの歩哨が血相を変えて此方に走ってきた。

エルジア共和国の予備士官が、同じくエルジア共和国の士官にピストルを向けられている

この構図に、その歩哨は呆然としている。

「唯、さわ子先生の…黄色の4の敵討ちのつもりなら、止めなさい。」

先程の声の震え、手の震えは止まっている。銃を撃ったお陰で吹っ切れたのか。

「…さわちゃんを殺した相手を、和ちゃんは許すつもりなの。」

私の問いに、和ちゃんは考える事なく即答した。

ええ

と。

「変わったね、和ちゃんは……私には出来ないよ。」
私の言葉に、和ちゃんは眉一つ動かさない。

いつの間にか彼女の表情は、高校時代に見せていた、生徒会長の表情に戻っていった。

高校時代に見せていた顔で、さわちゃんを死なせた仇を許すなんて…

和ちゃんは変わったよ……

そんな言葉を頭の中で呟きながら、私は足を進める。

ああ

「そこを退いて、和ちゃん。」

私は今

一步前に。

「駄目よ、退かない。」

どんな顔をしているのだろうか

また一步前に。

「もう一回言っよ…退いて。」

一体どんな顔で

足を進める。

「…来ないで、撃つわよ。」

彼女と向き合っているんだろう

「撃てば。」

その言葉と同時に、またあの乾いた音が空気を震わす。

私の顔の横を鉛の弾が掠めると、りっちゃんらが驚いて叫び声を上げるのはほぼ同時だった。

「…当たらなかったねえ、残念。」

私は意地悪げな微笑みを浮かべ、和ちゃんの前に立ち、彼女が握るピストルをその手から引き離した。

それと同時に、和ちゃんはその場に崩れ落ちるように座り込む。

私はそれを見届けると、再び歩き始める。

後ろから、「ちょ、ちょっと。」とあずにゃんの声がすると共に、皆の走る音がした。

私はそれに振り返ること無く、後ろ手に手を振る。
もう会うことは無いであろう、幼馴染みにむかって

嘗て私が見た、戦友の別れの光景の様に、さよならを告げる。

「……唯。」

和ちゃんの声。

私は足を止め、振り返る。

「何、和ちゃん。」

私を見つめる和ちゃんの瞳。

それに私はどう映っているのだろう。

「唯、私は…変わっていないわ。変わったのは、貴女よ。」

嗚咽の混じりの絞り出すような声を、大粒の涙を流しながら叫ぶ。

だが、私はその言葉に何の反応もしなかった。

りっちゃん達が私に追い付くと、私は和ちゃんに背を向ける。

和ちゃんは、さよならを言ってくれないんだね

なんて呟く。

聞こえることも無いであろう声で。

私が見たあの時の別れの光景と、私と幼馴染みの別れ姿を頭の中で比べつつ私は教導団司令部に向かう。

バイバイ、私の大切な親友

聞こえる筈の無い別れの言葉を、心の中で呟きながら

司令部に向う道中、皆は私に気を使ったのか一言も話さなかった。

その皆の気遣いは、私にとっては要らぬお節介だった。

最も、これから私たちは戦局挽回の大博打を打ちに行く。

例えば和ちゃんの件がなくても、司令部への道中は誰も喋らなかったのだろうが……

私達が司令部に着いたとき、既に私たち以外の予備士官らはイスに座っていた。

時刻は集合時間の15分前。

通信機の前に座る情報士官は居るものの、ジャン・ルイ大尉以下教官達ははまだ来ていない様だった。

上手い具合に5つ席が空いており、そこに座る。
周りを見ると、皆一様に表情が暗い。

項垂れている人

一心不乱にメモ帳にペンを走らせている人

強張った表情で、只前を見つめる人

ここに居る20余名の予備士官は、各々が自分の世界に入っていた。
誰にも侵されることの無い聖域。

例えばそれが鬼の教官らであっても、軍関係者からも畏怖の対象である憲兵隊であっても

誰にも邪魔されない世界に。

私も、自分の世界に入る。

目を瞑り、あの日の事を思い出す。黄色の13の過去を知った日の

こと……そして、私がリボンの戦闘機をこの目に映した日のことを

…

「おい、予備士官。」

キャンピングトレーラーから出ていったアシュレイ・ベルニッツを茫然と見つめていた私たちは、突然後ろから黄色の13と呼ばれて「ひゃ、ひゃい！」なんて間抜けな返事をしてしまった。

後ろを振り向くと、ばつの悪そうな顔をしているさわちゃんと中年准尉、若い下士官、そして鋭い目 スカイキッドで出会ったときよりももっと鋭い目の黄色の13のだった。

「な…なんでございますでしょうか。」
驚きの余りおかしな返事をするりっちゃんを無視して黄色の13は喋る。

「今日は突然の招待ですまなかった。」
と。

「本当なら、我々お得意の編隊飛行を見せて戦技の勉強でもしてもらおうと思ったが……それは止めた。」

そう言うなり黄色の13は徐に立ち上がり、私たちに近づく。

「お前達に聞いて貰いたい。俺の過去を。」

その言葉を聞いたさわちゃんは驚く。

「ちょ、ちょっと。黄色の13。それはどういつ……」

「いいんだ、サワコ。」

さわちゃんの言葉を遮るように喋る黄色の13。

「これは、今から10年前……俺がベルカの空を飛んでいた時の話だ。」

そして、黄色の13の独白が始まる。

寝室のベッドで、我が子におとき話をしつやる父親のような優しい口調で。

あの日　ベルカ絶対防衛戦略空域B7Rで鬼神と出会った日の事を

…

1995年5月28日

ベルカ絶対防衛戦略空域B7R

通称　円卓

雄武国家ベルカの国力の象徴であり、国家防衛の最重要エリア。
俺はあの日、その空を飛んでいた。

「基地からの援軍はまだか。このまま一気に畳み掛けたい」

隊長の叫びが俺の機体に響いく。

あの日、オーシア・ウステイオ連合軍は円卓に大規模な航空攻撃を敢行。

それに対してB7Rの常駐部隊は反攻し、連合軍に多大なる損害を与えた。

俺も常駐部隊の一員で、通算撃墜数も12機を数えた、エースと呼ばれるパイロットの一人だった。

だが、当時のベルカには俺の撃墜数を軽く上回るエースは腐るほどいた。

凶鳥フツケバインと呼ばれたベルカ空軍のトップエース、ウォルフ・ガング・ブフナー

灰色のスズメバチの異名を持つ第3航空師団のエリート、バステイ・アン・シュナイダー

軍航空学校の教官で、現役の頃は銀色のイヌワシと謳われたディートリッヒ・ケラーマン

……

大勢のエースが居たが、その中で今も生きてる奴は何人居るだろうか……

……話が逸れたな。続けるぞ。

敵味方が入り乱れる空中戦

そこらかしこで爆発音と、機銃の軽快な発砲音が響き渡っていた。

このまま押し返せる

誰もがそう思っていただろう。現に俺もそう思っていた。

あの日、あの空に居たベルカのパイロットでそう思わない奴はいなかった筈だ。

だがそのとき、18000フィートから急降下で二機の機体が入り込んだ。

あの時のことは良く覚えている。
なんせ、隣を飛んでいた僚機が機銃弾を浴びて一瞬で落とされたんだ。

突然のことに俺は目を疑う。

その瞬間、俺の横を飛び去る二機のイーグル。

一機は右翼を紅くペイントした機体

彼奴は片羽といって、当時名つての傭兵だった。

そして　その先を飛ぶ一番機

「タウブルグの剣を抜いた奴が紛れ込んだ。警戒しろ。」

隊長の指示も俺の耳には入ってこなかった。

俺は震えていた。

恐怖じゃない……奴を落とせば、名声を得られる。

そう考えただけで、俺の体は震えたんだ。燃え盛る闘争心を、抑えられずに。

タウブルグの剣

ベルカ南方のタウブルグ丘陵に建設された、超高層レーザー兵器エクスキャリバーの別名だ。

1995年5月23日にウスティオ空軍に破壊されるまで、それはベルカ最強の兵器だった。

だが、それは破壊された。

今、俺の目の前を飛ぶ

あの二機編隊の一番機によって

「奴らを落として名声を得る。」
自然と口が動いていた。

直ぐに機体を動かし、奴らを追尾する。

他にもオーシアの空軍機やウスティオの傭兵部隊が周囲を飛んでい

だが、俺の目にはあの二機しか入っていなかった。

だが、追いつけなかった。

巧みに空を飛ぶ先頭の一番機。

型にはまらない機動をする一番機に平然と続く二番機。

奴らを追尾して一体何分飛んだか俺は分からない。だが、奴らが円卓に来たことで、連合軍が息を吹き返したことはよくわかった。

円卓の磁場の影響で混線している無線通信。

敵と無線で会話できる程円卓は強い磁場が飛び交っている。

俺のコックピットには、反撃を告げるオーシアのパイロットと、あの一番機を鬼神と呼ぶ味方パイロットの悲鳴が響いた。

「援軍はまだか……本国は何をしている!」

隊長の絶叫が響いたかと思う瞬間、隊長機がレーダーより消えた。

「隊長機が消えた…指揮系統を確認！」

無線の向こうで誰かがそう叫ぶ。

だが、一度乱れた体勢はそう簡単には立て直せない。

もう駄目か……いや、奴だけは

全てを焼き尽くす様な鬼神の攻撃。

それに晒される味方を尻目に、俺は只目の前を飛ぶ鬼神を追いかけていた。

翼をもがれ火を吹いて落下する味方機

友軍機は最早数えるほどしかレーダーに映っていなかった。

だが、そのとき円卓北方より侵入する機体がレーダーに映った。

味方パイロットは援軍の到着と歓声を上げる。

だが、どうも様子がおかしかった。

その部隊は、一機の味方機を追跡するようにして侵入してきた。

その理由はすぐにわかった。

敵味方の通信を無差別に拾う無線に、はっきりとそれは聞こえた。

「シュヴァルツエリーダーより各機へ、逃走を図った機体がここへ逃げ込んだ。」

冷徹な声で、はっきりと

「…最悪の援軍だ。」誰とも知れない呟きが俺のコックピットに響いた。

シュヴァルツエ隊

正式名称 ベルカ空軍第13夜間戦闘航空団第6戦闘飛行隊シュヴ

アルツェ

ベルカ空軍の傭兵部隊であり、畏怖の対象であるエスケープキラー。隊長はドミニク・ズボフと言うチンピラのような風貌の男だった。俺も一度だけ基地で見たことがある。

路地裏のチンピラのボスのような顔つきで、飄々とした……だが、その目は常に獲物を狙うハゲ鷹の様な鋭さを持っている。

そんな印象をうけた。

そのドミニク・ズボフに率いられたシュヴァルツェ隊が、何故ここに来ているのか。
その理由は直ぐにわかった。

「相手はあのフツケバインだ。油断するなよ。」

フツケバイン

本名 ウォルフガング・ブフナー
当時のベルカ空軍において凶鳥フツケバインの名を持ち、名声を得ていたトップエース。

その彼を追い、シュヴァルツェ隊は円卓に侵入してきた。

俺はその時思考が一瞬停止した。

俺が子供の頃より新聞やラジオでよく見聞きしたその名前。

軍のパレードでは軍楽隊の盛大なファンファーレの鳴り響く中から登場するあの男

ウォルフガング・ブフナー大佐に憧れて、俺はこの大空に身を置いていた。

その憧れの対象が、今やエスケープキラーに追われる脱走兵に成り下がったんだからな

だが、その一瞬がそれがいけなかった。

その限りなく短い時間は、俺が鬼神をロストするには十分すぎる時間だった。

「……！」

眼前にあった二機のイーグルは、俺の視界から完全に消え去った。

俺は眼球を頻りに動かし、奴等を捜す。

蒼く広い円卓の空。

あの日は空が狭いと感じていたが、何てことは無かった。

いつもの空 だった。

只俺達が……ベルカ空軍機が落とされている以外は。

「くそ、厄介な奴等が敵に居る。作戦変更、逃走機は後にする。」

コックピットに響くシュヴァルツエリーダー ドミニク・ズボフ
の声を聞き、俺はレーダーの反応を見る。

そこに映るのは、シュヴァルツエ隊に接近する二機の機影。

それは紛れもなく、あの片羽と鬼神の姿だった。

俺はほくそ笑むと機体を彼らの向う北へ向ける。

シュヴァルツエ隊に落とされる前に、俺が鬼神を殺る為に。

だがその時、円卓の磁場はドミニク・ズボフの声を 新たな獲物
を見つけた狡猾なハゲ鷹の声を俺に届けた。

「出たな、化け物傭兵コンビ。」と。

その声を聞き、俺は焦った。

エスケープキラー、ハゲ鷹だと蔑まれるあのシュヴァルツエ隊だが、
奴等の腕は確かだった。

特にドミニク・ズボフは、ベルカ空軍パイロットの中でも十指に入る
エースだった。

そのエース部隊が、あの鬼神を狙っている。

ベルカ空軍のエースを次々と叩き落とし、畏怖の対象となっている
あの鬼神……

既に総撃墜数はベルカ空軍のトップエースであるブフナー大佐を上回り、名声を欲しいままにしている。

そんな奴を落とせば、俺は鬼神を落とし凶鳥フツケバインを超えたパイロットとして名声を得ることが出来る……

そう考える一方、俺のパイロットとしての勘が警告していた。

鬼神に近づくな。シュヴァルツェに任せておけ

と。

俺は、あのエスケープキラー達なら鬼神を落とせるんじゃないかと心の中で思っていた。あの鬼神は、これ迄に何人ものベルカ空軍のエースを落としてきた化け物だ。

だが、奴はベルカ空軍の型にはまった戦いをするエースを落としたということであり、それから外れたエースと戦うのは初めてだろう。

事実、あのシュヴァルツェ隊にはベルカ空軍の正規の兵士は一人も居ない。

奴等はユークトバニアや国を捨てたベルカ出身の傭兵であり、奴等の乗るMiG-31はその加速性能を生かした一撃離脱戦法を得意

としていた。

そしてそれこそが、シュヴァルツェがエスケープキラーとして恐れられている最大の理由だった。

傭兵同士の戦い……

俺は、シュヴァルツェがそれを制すると思っていた。

そしてあの時空にいたベルカ空軍パイロットなら、誰もがそう思っただろう。

だが、その考えが間違っていることが証明されるのに時間はかからなかった。

「全機……狩りを楽しむ余裕はねえぞ！」

ドミニク・ズボフの悲痛な叫びが無線の向こうで響き渡る。

既にシュバルツェ隊は半数が撃破され、あの鋭い機動は見る影も無く崩れ去る。

四羽のハゲ鷹は、二羽の鷺に追いたてられている。

そしてまた、俺の目の前で一羽のハゲ鷹が、鬼神の射線上に捉えられた。

そして、間髪入れずに放たれた一本のミサイル。

それは、大空の勇者達を無慈悲に叩き落とすS A A Mだった。

そのハゲ鷹は、回避行動を行う間も無く俺の目の前で爆散した。パイロットがベイルアウトをした風は無かった。

122

「何だ…このザマは。」

ドミニク・ズボフのその声は、最早力無い呟きだった。

それは、エスケープキラーとして畏怖の対象として軍に存在していた彼が初めて感じた恐怖だったんだろう。

そして、鬼神の圧倒的な強さを

ベル力最強のエスケープキラー達を軽々と葬るその姿に、俺は己の中の闘争心を掻き立てられるのを感じた。

そして次の瞬間、俺は飛び込んでいた。

ハゲ鷹と鷲が描く、複雑な軌道の中へと。

そして

…

「気がつくと、俺は円卓の地面に横たわっていた。空を見上げると、あの鬼神が最後のハゲ鷹を落としたところだった。」そう言って黄色の13は立ち上がると、部屋の窓を開けた。

太陽は西の空へ沈みかかっており、窓から見える景色は赤みを帯びていた。

「奴に落とされた時のことは覚えていない。気が付いたら叩き落とされていたからな。だが……」

そう言つて、黄色の13は私たちの方へ体を向ける。

開け放された窓から入る光は逆光となり、彼の表情を覆い隠した。

「俺はその姿を見て、奴に嫉妬した。そして、言い様の無い感情を……怒り、憧れ、恐怖……様々な感情が混ぜ合わさったものを感じたんだ。」

フフ、と自嘲気味に笑う黄色の13を、私たちは只じっと見ていた。その顔が果たしてどの様な表情をしているのか、私達には伺い知ることが出来ない。

「俺は、同じく撃墜された味方のパイロットと一緒に基地まで歩いた。そして、再び大空の戦いに身を投じたが　奴と再び会うことは無かった。」

フウと息を吐くと、黄色の13は窓を閉め自分が先程座っていたイスに座る。

「そして戦争は終わり、空軍パイロットはその大半が軍を追われたが、そんな俺達を拾ってくれる国も存在していた。」

オーシア

そう言つて親指を立てる。

ユークトバニア

次に人差し指を

そして、エルジア

最後に中指を立てた。

「エルジアに招聘された俺は、アグレッサー部隊の隊長に就任した。その部隊が、このアクイラ隊だ。」

「え……じゃあ元々黄色中隊は戦闘部隊じゃ無かったってことですか。」

あずにゃんの問いに黄色の13は「ああ。」と頷く。

「アクイラ隊は元々は戦技向上を目的とした教育部隊だったの。でも、ISAFとの戦端を開く際に高い錬度を誇るアクイラ隊は放置できない存在だった。」

さわちゃんが淡々と語り始める。

「この戦争の初期に、エルジアがストーンヘンジを接收したのは知

つてるでしょ。」

私たちは頷く。

サンサルバシオンに進行したエルジア軍はストーンヘンジを接收。その強大な威力をもつてして、大陸の空を支配した。

本来なら宇宙より飛来する筈の隕石を打ち砕くべく創られた希望の象徴は、大陸の空を支配する恐怖の象徴へ成り下がったのだ。

「当時ストーンヘンジを防衛していたSTN警備飛行隊は、エルジアのどの空軍パイロットよりも高い錬度を誇っていたわ。特に隊長のジョン・ハーバードは各国を渡り歩いた名うての傭兵だったの。」

「そのSTN警備飛行隊に対抗するために、黄色中隊は投入されたって訳ですか。」

あずにゃんの言葉に、さわちゃんは「ええ」と頷いた。

「もともと戦技向上の為のアグレッサー部隊だったから、生徒にも優秀なパイロットが多かったらしいわ。」

それが今のアクイラの礎なのよね、と言いながらさわちゃんは黄色の13をみる。

さわちゃんの言葉を聞き、それを懐かしむような表情を見せる。

スカイキッドで出会ったときの、冷徹な表情は微塵も感じさせない。そこに居るのは、“黄色の13”と呼ばれるエースではない。

私の目の前には、只の一人の男性が座っていた。

「あの日、STN警備飛行隊との戦闘に参加した隊員でこの中隊に居るのは俺だけだ。」

突然の言葉に、私たちは目を丸くする。

「え…でも、この人たちは……」

ムギちゃんが中年准尉や若い下士官を交互に目で見る。

しかしながら当の彼らは何も答えない。若い下士官に至っては目を横に逸らしている。

「あの准尉はその日は編制から漏れていた。サワコやあの若造はアキラに在籍すらしていなかった。」

中年准尉、さわちゃん、若い下士官の順に黄色の13は視線を移していく。

「ベテランは他の部隊に引き抜かれる。彼らも同様だった。アキラに居るなら、俺は戦場で彼らを守ることが出来たが、他の隊に居るとなればそれは不可能だ。」

それって

りっちゃんがそう口にしたとき、黄色の13は顔を上げる。

その目はりっちゃんを見つめると再び視線を落とした。

「ああ……彼らは、戦死した。」

と。

「生き残ったのは俺と、もう一人いる。そいつは幸運にも教育部隊の教官に任命された。」

君たちもよく知っているだろうと続ける。

私たちは互いに顔を見合わせる。

私たちの知っている人に、そんな人物がいたのだろうか。だが、いたのだ。

予備士官学校の教官に

黄色の13をボスと呼ぶ人物が。

黄色の13が、生徒と読んだ教官が

「それって……ジャン・ルイ大尉のこと……」

私は黄色の13にそう問いかける。

その問いに、黄色の13は口元を緩め、「ああ、正解だ。」と言った。

「彼奴は優れたパイロットだった。技術は他の奴より頭一つ抜けていた。」……だが、と彼はそこで言葉を詰まらせる。

「貴方と反りが合わなかったのよね。」

と、さわちゃんが割って入る。その口調はあの時の 文化祭の演奏衣装を持つてくるときの少々意地悪げな笑みで。

「中隊間の連携を重んじる貴方と違って、個人の技量を最重要視するジャン・ルイさんは犬猿の仲だったのよね。」

フフフツと笑いながら言うさわちゃんの言葉と違って、黄色の13は少々困り果てた様子だ。

「個人の技量を重んじるエルジア空軍の風潮に、ベルカ空軍のやり方は合わなかったからな。ジャン・ルイは俺のことを、ベルカの亡霊とまで言いやがった。」

そう言うって薄く笑う黄色の13は、当時を懐かしんでいる様だった。今きくと、彼の頭の中を当時の光景が駆け巡っているのだろう。

「ジャン・ルイ大尉は昔から何でもズケズケと言ってたんだなあ。」

と、りっちゃん。

何やら一人納得した様子だ。

だが、容易に想像できる。

ジャン・ルイ大尉の苛烈な性格に加え、あの夜の言葉

きつと、黄色の13とジャン・ルイ大尉 当時はジャン・ルイ生徒だが は度々衝突していたんだろう。

「あら、もうこんな時間じゃない。」

さわちゃんが、自身の腕時計を見て少々驚いた声を上げる。

私もその声につられて窓の外を見ると、既に外は暗闇に包まれ、意地悪な冬将軍が寒い風を吹かせていた。

「そろそろ帰らないと不味いなあ。」

と、澪ちゃんが呟く。

確かにこれ以上長居は出来ない。

元々ジャン・ルイ大尉は、私達が黄色中隊の基地に行くことに賛成では無かったし、生真面目なジーン中尉はきつと小言を言うに違いない。

「じゃあ、車で送ってとてあげるから……」

とさわちゃんが言い終わる前に、あの若い下士官が

「あ……自分が送ります。」
と言った。

「あら、いいの。」

とのさわちゃんの問いに対し、彼は「はい。」と言った。

「そう……じゃあ任せるわね。」

とのさわちゃんの声を聞くなり、彼は「了解。」と言いキャンピングトレーラーから出ていく。

私たちも彼の後を追いかけて外に出る。

辺りは窓から見たように真っ暗で、月明かりが滑走路の近くに置かれた対空機銃を朧気に映し出していた。

空には星が瞬きをする。

そして、空を翔る一筋の光

「あ……流れ星だ。」

私の声に反応し、皆が夜空を見る。
だが、その光は既に消え失せていた。

流れ星は隕石の欠片が大気圏に突入したもの

そう学校で教わったことがある。

私たちはその隕石の欠片に願いを託す。
それは滑稽なことじゃ無いだろうか。

私たちの平和を

日常を

奪い去った戦争を引き起こした隕石、ユリシーズ。

その欠片に、私たちは願いを託す。

もう一度、あの日常を

友達と笑いあった放課後を、返してはくれないだろうか、と。

「あ、皆さん。こちらです。」

基地駐車場に行くと、大型のハンヴィーの前に立っている若い下士官が居た。

「サンプロフェッタ空港までお送りします。乗ってください。」

そう促され、私たちはハンヴィーに乗る。

基地のゲートが開けられ、夜の街をハンヴィーが走る。

「自分は、黄色の13があんなに饒舌だと初めて知りました。」

ハンヴィーを運転しながら彼はそう呟く。

ジャン・ルイ大尉の様な荒っぽい運転ではなく、落ち着いた運転だった。

「いつも寡黙で物静かな黄色の13が、何故貴女達にあの様に自らの過去を話したのか……」

自分には分かりません、と続ける。

私たちは只それを聞いていた。

不意にハンヴィーが停止する。信号が赤の目を光らせていた。

「只…自分から見た黄色の13は、何時もより楽しそうな気がしました。」

「楽しそう……ですか。」

あずにゃんがそう呟くと、若い下士官は「ええ、楽しそうでした。」と言った。

そんな話をしているうちに、私たちはサンプロフェッタ空港に着いた。

ゲートに着いたハンヴィーより若い下士官は顔を出し、歩哨に一言二言告げるとゲートが開く。

「それじゃあ、自分はこれで。失礼します。」

私たちをハンヴィーから降ろした若い下士官は、挙手敬礼を行う。

私たちはそれを受礼すると、ハンヴィーは空港を後にした。

月明かりに負けぬ光を照らす管制塔。

滑走路を走る誘導灯に、夜空を翔る探照灯。

街の外れにあつた粗末な野戦滑走路とは違い、サンプロフェッタ空港は光に覆われていた。

この飛行場からは、星空は十分に見えない。

忙しなく動く探照灯や、夜間でもお構い無しに空を飛ぶ軍用機が邪魔をして星は隠れてしまうから。

でも、私はそれで構わない。

星が見えない　　いや、星を見ようとも思わないような夜空の方が私は良い。

きつとその方が、あの忌まわしいユリシーズの流れ星を見なくて済むから。

「私な、よく流れ星を探してるんだ。」

私の気持ちを知ってか知らずか、湊ちゃんがそう言った。

私は横目に澪ちゃんを見る。

嫌味の一つでも言ってやろつかと言う衝動を、ぐっと堪えながら。

「へえ、何を願うんですか。」

あずにゃんの問いに、澪ちゃんは寂しげに笑いながら

「まあ、まだ叶ってないというか……叶わないって分かってるんだけど、こうお願いしてる。」

もう一度、皆とあの放課後を過ごしたい

って。」

澪ちゃんのその言葉に、私は自分が顔をしかめたのがわかった。だが、あずにゃんがこちらを見て訝しげな顔をしたのを見て、必死に偽りの笑顔を浮かべる。

「……大丈夫よ。きっと、またあの放課後を過ごせるわ。」

ムギちゃんがそんな根拠もないことを言うと、りっちゃんとあずにゃんも頷いた。

私もそれに続いて曖昧な返事をする。

だけど、心の中では思っている。

流れ星に祈ったところでさ、戦争は終わらないよ　と。

もうお互いに必死なんだ。
エルジアも、ISAFも。

どちらかが消えて無くなるまでこの戦争は終わらない。

そんな血みどろの戦争が、流れ星に祈ったところでどうなるというのだろう。

心の中で悪態をつきながら私が空を見上げると、一筋の光が空を走る。

流れ星だ。

これ見よがしに私の視界を走る流れ星に若干の怒りを抱きながら、
だけでもそれを隠しながら
「みんな、寒いから早く行こうよ。」

と促す。

それを聞いた皆は足早に空港内に向う。
それに続く私は再び空を見上げる。

何てことはない。

只、気になっただけだ。

夜空にはもう、流れ星は走らなかった。

アクイラ隊野戦滑走路！

唯達が若い下士官を追いかけてキャンピングトレーラーを後にする。
黄色の4こと山中さわ子は中年准尉に「少し席を外してくれない。」

と言い、彼を外に出した。

そして、二人だけの空間となったキャンピングトレーラー内。先程
までの賑やかさの反動か、やけに静かだと山中さわ子は感じていた。

「で、俺に何か話があるのか。サワコ。」

黄色の13ことエーリツヒ・クリンスマンの言葉に、さわ子は微笑む。

それは、生徒であつた平沢唯らに向ける笑顔とはまた違ったものだった。

「あら、お互いに愛し合つてる者同士が二人っきりになるには、何か話す話題が必要なわけかしら。」

そう言つと、フフツツと笑うさわ子は黄色の13に向けて

「冗談よ。」
と囁いた。

「……で、一体何のつもりなの。」

そう黄色の13に言い放つ彼女の目は先程とは違い、笑っていないかつた。

その鋭く光る目は、愛する者に向ける目では無い。

「あの話は、私だけにしかないんじゃないかなかつたかしら……少し嫉妬しちゃうわ。」

その言葉を、黄色の13は只黙つて聞いている。

俯く彼の表情は、さわ子からは伺い知ることは出来ない。

「……歴史には、証人が必要だ。あの予備士官らにも、知っておい
て貰いたかったからな。」

「……貴方の過去を、かしら。」

さわ子の問いに、黄色の13は「ああ。」と返す。

「残念だけど、あの子達がこの戦争を生き延びないとそれは語り継
がれないわよ。そして今のあの子達では絶対に生き延びられないわ
。」

さわ子はそう述べる。

静かにゆっくりと、そう、それはまるで生徒を諭すような口調で。

「……それは心配要らない。彼女らはまだ予備士官学校に居る、前
線へはまだ赴かない。それに……」

黄色の13は上着のポケットより煙草を取り出す。

それをくわえ、火を着ける。

肺に煙を満たし、吐き出すと忽ち室内に煙草独特の匂いが充満する。

「もし彼女らが前線へ赴くなら、お前が助けてやれば良い。安心し
ろ、転属願なら何時でも受け取るさ。」

そう言つて下卑た笑いをする黄色の13。

これは普段から冗談を言わず寡黙な態度を崩さない彼なりの、精一杯のジョークだった。

さわ子はそれを誰よりも理解していた。

だが、今は違う。

今は、そんなジョークを言うような場面では無いのだ。

怒鳴り付けたい衝動を、息を大きく吸い込み、そして吐き出すことで抑える。

これは高校教師時代からの癖。

そして、桜ヶ丘女子校の軽音部の顧問をしていた頃からの習慣だった。

「……それは無理よ。」

さわ子の言葉に、黄色の13は少々驚いた様子だった。
くわえていた煙草を灰皿に擦り付ける。

「無理ということは無いだろう。現にお前は、エルジア空軍のエースだ。お前と渡り合えるパイロットなんて、ISAFには……」

そこまで言つて気付いた。

黄色の13の脳内を走るあの光景。

自分が率いる中隊機に、機銃弾を命中させたあのパイロット

蒼く広い空

まるであの日の円卓を彷彿させるかの様な、多数の戦闘機が入り乱れるコモナ島の上空で、彼は見た。

嘗て自身が闘い、そして落とされたあの鬼神。

変幻自在に空を飛ぶあの鬼神の面影を持つパイロットを

コモナ島の空中戦に参加していた一人のエルジア軍空中管制官。

被弾した黄色中隊のパイロットが叫ぶように敵の確認を求める。

だが、多数の戦闘機が入り乱れる空での敵の確認は容易ではない。

だが、その管制官は其を見た。

黄色中隊機に機銃弾を命中させた一機のF-22……その機体に描かれた特徴的なシンボルを。

それはメビウスの輪と呼ばれるものだった。

だが、その管制官はそれを知らない。

そして彼が咄嗟に口走ったその呼称は、大陸戦争を通じてそのISAF軍パイロットの通り名となった。

それは

「……リボンのエンブレム、か。」

リボンのエンブレム

落日のISAF陣営に颯爽と現れ後退していた戦線を復活させたパイロット。

後に大陸戦争最大の英雄と呼ばれるのだが、それはまだ先の話だ。

「ええ……あのパイロットが空を飛ぶ限り、私たちも安心出来ないわ。」

リグリー飛行場の奪還、無敵と言われたエイギル艦隊の封殺、コモナ島上空の空中戦……

ISAF軍の重要な戦闘にリボンのエンブレムは参加し、そして勝利を牽引してきた。

既にエルジア空軍のパイロットに、その名は轟いている。

「私……たまに思うのよ。もし、私とリボンのエンブレムが空で出会ったらどうなるのかってね。」

フフフと笑うが、その端正な顔は笑いきれていない。

その目は、寂しげだった。

さわ子は入り口へ向う。

黄色の13はそれを止めようとはしない。

止めたところでかける言葉が見付からないからだ。

「……ねえ。」

ドアを開けようとしたときに、さわ子はそう呟いた。

「もし……私が死んだら、あの子達を守ってくれるかしら。」

「縁起でも無いな。やめてくれ。」

黄色の13はそう口に出す。

久しぶりに教え子と会って弱気になったか

彼はそう気楽に構えていた。

だが、こちらへ振り向いたさわ子の顔を見てそれが間違いだと思い知らされる。

さわ子は、涙を流していた。

黄色中隊にさわ子が来て、涙を流す姿など一度も見たことが無い。

否、以前居た部隊においても、彼女が涙を流すなど聞いたことがなかった。

「……わかった、約束しよう。だからサワコ、気を強く持て。」

空の戦いにおいて、気弱になったものは直ぐに落とされる。

黄色の13はそれを良く知っていた。

今のさわ子が戦場に出れば、あつという間に落とされるだろう。

「……ありがとう。ごめんなさいね、こんな姿見せちゃって。」
さわ子はそう言つと、ドアを開ける。

「……いや、いいんだ。」

黄色の13の声が届いたかどうかは分からない。

言い終わったときには既にさわ子は出ていった後だった。

誰も居なくなつたキャンピングトレーラー内。

再びポケットに手をつ込み、煙草を取り出す。
残り一本の煙草を惜しげもなくくわえ火を着けた。

彼の胸の奥底に漂う一抹の不安。

さわ子があんなことを言うことなど今までに無かつた分余計に気味が悪い。

煙草を吸えば気が晴れるだろうと思つていたが、予想に反してその不安は増幅していった。

「……何もなければ良いがな。」

気がつけばそんな言葉が口から出ていた。

いつもならば旨い筈の煙草も今日は不快に感じる。

こんな日はシャワーを浴びてさっさと寝るに限る。

そう思い立ち上がる。

カーテンを閉める為に窓に近付くと、空を走る一筋の光が見えた。

流れ星だ。

いつもならば何も感じ無い筈の流れ星に、今日は願わずにはいられない。

サワコに、何も無いように

と。

オペレーション・ノアズアーク

2005年3月14日

ユージア大陸東部の都市ロスカナス、その北西の丘陵地帯チョピンブルグ上空を、自分は飛んでいる。

飛んでいるとは言っても実際に機体を操縦しているのはパイロットであり、自分は只この機体 E-767 に乗っかって居るだけの空中管制官に過ぎない。

しかも機体は交戦エリアより遙か後方を飛んでいる。重鈍な警戒管制機であるこの機体は、後方より空中管制を行うのが与えられた役割なのだ。

交戦エリアに向かう機体は一機のF-22だけである。ISAF加盟国に亡命するストーンヘンジの技術者達とその家族を乗せた二機の民間機、それを護衛するためだ。

たった一機で護衛なんて無謀すぎる

そんな声は誰からも聞こえなかった。

当然だ。

その護衛機には、間違いなくISAF最高のパイロットが乗っている。

そんな心配など、するだけ無駄なのだ。

彼と自分が初めて空で出会ったのが、今から半年前だ。

それ以来、何の縁かは知らないが彼の出撃するミッションの空中管制を自分が担当している。

自分は彼を相棒だと思っているが、向こうはどう思っているだろうか。

……まあ、そんなことは関係ない。

今は只、彼に情報を送るだけ。このミッション　ノアズアーク作戦　を遂行し、二機の民間機を無事に逃がすことだけを考える。

そう言えば、彼は軍の情報部によるとエルジア軍の間ではある通り名で呼ばれているらしい。

それが何という通り名だったのかは忘れてしまったが……

「レーダーに反応。エアイクシオン機です。」

ギャレーから持ってきたサンドイッチを食べながらそんなことを自分が考えていると、隣の情報士官が叫ぶ。

自分はサンドイッチを食べるのを止め、慌てて民間航空エアイクシオン機への通信回線を開く。

「エアイクシオンへ。状況を説明してください。」

「こちら702便、エルジア軍機が高度23000で接近中！急いでくれ！」

無線の向こうで聞こえる叫び声。

空軍機に追い立てられたことの無い民間機パイロットには、今の状況は恐怖そのものだろう。

「こちら701便。離陸時に機長が負傷、副操縦士のナガセが操縦しています。」

女性パイロットの声だ。

一見、先のパイロットとは対照的に落ち着いている様に聞こえる。

説明された状況は決して芳しくない。

だが自分は焦らない……否、焦ってはいけないのだ。焦りはミスを誘う。

この空の戦いでは、小さなミスも命取りだ。

そして何より、焦りは不安を産み不安は伝染する。

落ち着け

息を大きく吸い込み、そして吐く。

味方が敵と交戦する直前は、これをしないと落ち着かない。

今までに何百回とやってきた習慣。

頭がクリアになる。

大丈夫だ。

護衛は自分が最も信頼する相棒だ。

今回もきつと成功する。今までのミッションと同じように……

不安と焦りを頭から払い、エアイクションへ伝える。

「了解。護衛機が行きます。両機とも、進路を維持してください。」

そして、我が相棒へ

「メビウス1、こちらスカイアイ。エアイクション機にエルジア空軍機が高度23000で接近中。交戦を許可する、エアイクションをやらせるな。」

無線の向こうから「了解。」と機械的に返事になされる。

彼と初めて出会ったときからそれは変わらない。

「メビウス1、エアイクシオン機へ接近中。」

「エルジア空軍機、エアイクシオンへ接近します。」

情報士官が次々に叫ぶその声を、自分はただ黙って聞いている。

大丈夫。

きつと直ぐに、あの報告がなされる。

今まで飽きるほど聞いた、あの報告が。

「メビウス1、Fox2。」

そらきた。

なら、あの報告も直ぐだろう。

「メビウス1、敵機撃墜。」

レーダーに映っていた敵機の反応が消える。

この光景は今までに何十回と見てきた。

彼と初めて空を飛んだときから何一つ変わらない。

それと同時に、機内に安堵の空気が流れる。

しかしそれは、一つの叫びにより引き裂かれた。

「エルジア空軍機、高度6000で接近中。二機います。」

直ぐに彼へそれを伝える。

「メビウス1、新たな敵機を捕捉。高度6000で701便に接近中。」

返答は無い。理解したのかしてないのか、それすら不明だ。だが、それは今までも同じだ。そして、それで成功してきた。今回も必ず成功する。

自分はそう信じている。

そしてその時、フと頭を過る記憶

仲の良い情報部の同期から聞いた話を、自分は思い出す。

ああそうだ。

思い出した。

今、敵と戦っている彼は確か、エルジア軍の間ではこう呼ばれていたんだ。

リボンのエンブレム と。

なかなか素敵な通り名じゃないか。

あいつが無事にこのミッションを遂行して帰って来たなら、聞かせてやらないといけない。

レーダーには、交戦エリアより退避する二機のエアイクションとそれを撃墜せんとする二機のエルジア軍機。

そして、エルジア軍機に向かう一機のF-22が写っている。

「民間機を護衛しながら複数の敵と交戦なんて……」

誰かがそう呟く。

大丈夫だ。

彼は不可能とも思える作戦に何度も参加し、そして勝利を牽引してきた。

そしてそれは今回も変わらない。

任せたぞ、
相棒

ばんがいへん、
了！

すーんへんじくうしゅう!!!

2005年4月1日

黄色中隊の野戦滑走路に初めて行った日から、私たちは訓練の無い日を見計らってはさわちゃんに会いに行っていた。

昼は黄色中隊の野戦滑走路、夜はスカイキッドに入り浸る。

自然、中隊隊員やスカイキッドの従業員とも仲良くなっていた。

「んゝ君はいつも暖かだねえ。」

4月とはいえ風が僅かに肌寒く感じる今日この頃、私たちは相変わらず黄色中隊の野戦滑走路に訪れていた。

私が野戦滑走路に住み着いている犬を抱き抱え頬擦りしていると、我が愛しの後輩がジッと見つめていた。

「あれえ、あずにゃんも頬擦りして欲しいのかな。」

少々嫌味な笑みを浮かべてそう問うと、彼女は頬を赤らめて拗ねたようにそっぽを向いてしまった。

それを見て、皆はクスクスと笑う。

「なんかさ、こつやつてるとあの軽音部のときみたいだな。」
りっちゃんはその呟いた。

そう。

さわちゃんと再開してから、私たちには再び笑顔が戻ってきた。

軽音部の部員と顧問が再び出会う。

それにより、私達が軽音部の気分を取り戻すのに時間はかからなかった。

あの放課後の、皆で笑いあったあの光景が少しずつ蘇る。

戦争で失った時間を少しずつ取り戻すかのように

だが、私たちが笑いあっているのと時を同じくして、戦いの火の粉は少しずつサンサルバシオンに近付いてきていた。

3月14日……私達が「今日はホワイトデーだね。」
なんて浮かれていたその日、ストーンヘンジの科学者達が民間航空機を使ってISAF加盟国に亡命する事件が起きた。

追撃するエルジア空軍機を撃退したのは、あの名高いリボンのエンブレムの戦闘機だそうだ。

そして、大陸に配置されたエルジアの諸部隊は来るべきISAF軍との戦闘に備えていた。

それはサンサルバシオン方面軍も違いは無く、前線より敗走する諸部隊を取り込み兵力を拡大していた。

上空を飛び交う戦闘へりは官庁街の静けさを吹き飛ばし、ビルの屋上に設置される高射砲は日増しにその数を増やしていく。この町を目指し、ISAF軍が近付いてくる。

ただど私たちはそれをどこか他人事のように考え、呑気に毎日を過ごしていた。

「申し訳有りません。」

滑走路の一角で犬とじゃれ合う私たちに声かけられる。

私達がそちらを向くと、中隊の衛兵が立っていた。

「黄色の4は現在予備機材の確認をしております。時間がかかりますので、もう少々お待ちください。」

申し訳なさそうにそう告げる衛兵に対してムギちゃんは

「いえ、突然押し掛けた私たちに非があります。お気になさらず。」
と返した。

衛兵は私たちに一礼するとその場を立ち去る。

いつもと変わらない光景。

その筈だった。

野戦滑走路の外れにある予備機材庫。

突然そこから爆発音がしたかと思うと、黒煙が空に向かって立ち上る。

私が抱き抱えていた犬がそれに驚き飛ぶように逃げていく。

私たちが何事かと思って立ち上がると、黄色中隊の隊員が大急ぎで予備機材庫に向かって走って行く。

私たちは、それをただ呆然と見ていた。

そして、りっちゃんが青い顔をしながら呟く。

「……なあ、さわちゃんてさ。今……どこに居るんだ。」

と。

私たちは一瞬その質問の意味が理解できなかった。

だけど、それを理解した者はりっちゃんと同じ様に顔を真っ青にした。

もちろん私もその意味がわかった。

顔から血の気が引くのがわかる。

そうだよ、さわちゃんは今

あそこにいる。

あの煙の立つ場所に、彼女はいるんだ。

私の足は段々速度を上げる。

恐らく私がここまで速く走ることはいくらからの人生で無いだろう。

それくらい、私は焦っていた。

何に焦っていたか

さわちゃんを失うこと。

それもある。

だが、正確には違う。

私が一番恐れていたこと。

それは、今ある日常を失うこと だった。

さわちゃんを失うことで、皆が再び笑顔を失うかもしれない。

そうすれば、今私の手の中にある日常というあの青い鳥は、また私から遠ざかる。今又それを失えば、再び戻ってくることは無い

私は、それを恐れたのだ。

だからこそ私は走った。

さわちゃんが無事であることを確認するため。

そして

まだ私の手の中に、青い鳥が居ることを確認するために

私は彼女の元へ走った。
そして

...

.....

私はさわちゃんを見た。

衛生兵に支えられながら歩くさわちゃんは、右手を負傷していた。

私を見つけて悪戯気に舌を出して笑っていたが、その顔は痛みに耐えきれずに歪んでいたのを……私は覚えている。

その直後、皆が私に追い付く。

私にさわちゃんの様子を聞き、皆一様に表情を暗くした。

漣ちゃんは“血”に反応し青白い顔をしていた。

その時、私たちの背後から声がかけられる。

あの中年准尉だった。

聞けば予備機材庫に爆発物が仕掛けられていたらしく、安全のために退避せよとのことだった。

私たちはそれを聞き、重い足取りで野戦滑走路より待避した。

向かう先はサンプルフェッタ空港の予備士官宿舎。

この街での、私たちの居場所だった。

りっちゃんが酷く激昂していたのを覚えている。

「さわちゃんを怪我させた奴をぶちのめしてやる。」

そう声高に叫んでいた。

漣ちゃんとムギちゃんは始終暗い顔をしていた。

「さわちゃん……大丈夫なのかな。」

と漣ちゃんは呟いていた。

あずにゃんは俯き、何かを考えている様子だった。
じっと下を向き、表情が見えない。

そして顔を上げ

「このサンサルバシオンにも、レジスタンスが居たんですね……」

と言う。

レジスタンス

エルジアの支配に反発する民衆が組織した抵抗勢力。

表向きエルジアに協力する素振りを見せり市民が見せる、裏の顔……

ISAF軍に通じサンサルバシオン攻撃の手引きをしているという噂も、方面軍の間で流れていた。

私たちは改めて感じた。

戦争というものを。

私たちはさわちゃんと再開して、高校時代と変わらぬ毎日が少しでも帰ってきたのではと喜んでいた。

しかし、何てことは無かった。

私たちは忘れていたのだ。

自分達が、戦争の真っ只中に居ることを。

この、一見平和気なサンサルバシオンの市民の中には、私たちに牙を向けんとするレジスタンスが居ることを

その様な事など知らずに、只ヘラヘラと笑いながら過ごしていたなんて……

全く、笑ってしまつよ……

私の手のひらの青い鳥は、もう居なかった。

いや

もともと私は、青い鳥なんて捕まえていなかったんだ。

私は、幻を見て安心していたんだ

あの、キラキラと輝く高校生活……

それが少しでも返ってきているのではないか。

そんな幻を、私は見ていたんだ。

…

よくじつー!!

2005年4月2日

私たち五人は、黄色中隊の野戦滑走路に居た。

普段は平穏げな雰囲気の野戦滑走路のゲートは、今日は大勢の歩哨が立っていた。

彼らは皆、昨日の“あの時”までは野戦滑走路内で仮染めの平和を享受していた筈だった。

だけど、それはあの時

あの爆発で打ち崩されたんだ。

ゲートをくぐり敷地内に入るとき、私はチラリと歩哨の顔を見た。

いつもの朗らかな笑顔は消え、顔の表情筋を強張らせている。

この部隊にも、戦争が近付いてきているんだ。

私はそんなことを考えながら野戦滑走路内を歩く。

皆は一様に無表情だ。

漚ちゃんは俯き加減で、その表情は傲慢の長い黒髪で隠れてしまっている。

いつもは元気で皆のムードメーカー的存在のりっちゃんと、まるでフランス人形の様な可愛らしい顔立ちのムギちゃん……この二人も表情は暗い。

あずにゃんもいつもの威勢は消えてしまい、正しく“借りてきた猫”の様にシヨボくれていた。

特に、いつもは私と悪ふざけをして場の雰囲気と和ませる存在のりっちゃんが黙り込んでいることが、今回の事態が私たちにとって大きな精神的ダメージであることを再認識させた。

結局さわちゃんの居るキャンピングトレーラーの前に着くまで、誰一人口を開くことはなかった。

空は憎らしいほど澄み渡っている。

雲一つ無い青空とは裏腹に、私たちの心は重く沈んでいた。

そうこうしているうちに、私たちはさわちゃんのキャンピングトレーラーに着いた。

いつもならばりっちゃんがドアを勢い良く開けるのだが、今日はそうしようとしなない。

「おい……漣、ドア開けてくれないか。」

「え、私がか……。」

りっちゃんの申し出に、もともと痛いことや怖いことに対しての抵抗感が人一倍大きい漣ちゃんは、扉を開けることにあからさまに嫌な顔をした。

気の弱い漣ちゃんは、その端正な顔を不快に歪めてりっちゃんに対して精一杯の抵抗をする。

りっちゃんはそれに負けたのか、やれやれといった様子でキャンピングトレーラーの扉に近付いた。

りっちゃんが手を伸ばす。

その指先が扉に触れるその瞬間、扉が勢い良く内側より開かれた。

「いてっ……な、なんだあ。」

カチューシャをつけて前髪を上げているりっちゃんは、おでこが丸見えだった。

そのりっちゃんのトレードマークとも言えるおでこに、キャンピングトレーラーのアルミ製の扉が直撃したのだ。

そして、扉が開かれた向こう側より覗く顔。

「貴女達、どうしたのよ。」

それは私たちの突然の訪問に驚くさわちゃんだった。

「なんだ……そうだったの。」

あの後私たちは、さわちゃんに今日の訪問の理由を告げた。

さわちゃんは、昨日怪我した左腕をわざとらしく見せる。

「火傷よ。後が残るらしいけどね……」

包帯にぐるぐる巻きにされた前腕は痛々しい。

澪ちゃんは顔を青白くさせている。

「まあ、さわちゃんの怪我がそこまで酷くないなら良かったな……」
りっちゃんのその言葉に、さわちゃんは苦笑いをした。

「まあ……私は大丈夫なんだけどね。」

そう言ってさわちゃんが見つめる窓の先には、俺退壕がある。

高速道路のトンネルをりようしたお粗末な掩体壕。

その中に、それはあった。

「これが……黄色中隊の機体。」

わたしの眩きは、掩体壕の暗闇に吸い込まれた。

主翼の先端と尾翼を黄色く塗装し、さわちゃんのコールサインのナンバーである「4」を尾翼にペイントしたSU-37。

黄色い旋風として戦場を駆け抜ける筈の機体は……大空を自由に羽ばたく筈の黄色い荒鷲は、今は地上の薄暗い壕の中で縮こまっていた。

「エンジンが調子悪くてね……昨日取り替える予定だったんだけど。」

「そこまで言われたら、後は私にもわかる。」

昨日の爆発で予備エンジンは全滅したんだろう、

そして心臓に爆弾を抱えたこの機体は、大空に羽ばたく事なく地上で羽を休めている。

「パイロットは大丈夫だけど、機体が不調だなんて……笑っちゃうわよ。」
そう言ってケラケラと笑うさわちゃんは、いつもの笑顔になっていた。

私たちはその顔を見て安堵する。

ああ、やっぱりいつものさわちゃんだ。大丈夫。

私たちは互いに顔を見合わせた。

「じゃあ、私は戻るわね。今日はありがとう。」

さわちゃんはそう言ってキャンピングトレーラーに帰っていった。

私たちはそれを見届けると、りっちゃんの「帰ろうか。」という言葉
葉に頷き、野戦滑走路のゲートに向かい足を進めた。

さわちゃんは無事だった。

この事実が私たちをどれだけ安心させただろうか。

りっちゃんや澪ちゃん、ムギちゃんは顔を綻ばせている。

いつもは仏頂面のあずにゃんも、今は標準穏やかだ。

来るときは、まるでお葬式のような空気が私たちを取り巻いていたが、
それは冬と春の境目に吹く冷たい風に吹き飛ばされた。

今私たちは、春を待ち焦がれる花の蕾のような気分だった。

だが、それは容易く打ち砕かれた。

あまりにも容易く　　まるで、ストーンヘンジが上空を飛ぶ飛行
機を撃ち落とすかの様に。

私たちがゲートを通る直前に、甲高いサイレンの音が空気を震わせ

た。

「な……何だ、これ。」

りっちゃんや澪ちゃんは身体を強張らせて辺りを見回す。

「これは……空襲警報、ですかね。」

あずにゃんはそう私に問い掛けるが、私に分かる筈はない。

私はただ、首を横に振るだけだった。

私たちの後ろ　野戦滑走路では、中隊関係者の怒号と大勢の人間の走り回る音がしている。

その異様に、私たちは圧倒された。

「これは一体、何なんですか。」

ムギちゃんは、冷静にゲートの歩哨に聞いている。

例え何があるうとも持ち場を離れるな、とでも言われているのだろうか。

野戦滑走路内の兵士達が走り回っているのに対し、今私たちの前に居る歩哨は整然とゲートの前に立っている。

「これは、ストーンヘンジの空襲警報です。」

ストーンヘンジの空襲警報

整然とした姿勢で、落ち着いた口調で、彼の口からその言葉が発せられた。

それを聞いた私たちの顔は、どの様になっていただろうか。

だけど、それを知る目の前の歩哨はただ話し続ける。

「ストーンヘンジにISAF軍航空隊が接近した場合、この空襲警報が発令されます。その場合は、黄色の13が列機を率いて出撃します。」

出撃

その言葉を聞いた瞬間、私たちは走り出していた。

後ろから歩哨が何かを叫んだが、そんなことはお構い無しだ。

私たちの目的地は一つしかない。

さわちゃんのキャンピングトレーラーだ。

以前、さわちゃんからこう聞いたことがある。

私はね、黄色中隊の二番機として一度も編制割りから外れた事がないのよ。これは私の誇りなの

と。

そう自慢気に話していたさわちゃんの事だ。

もし自分が編制から外されていたら、黄色の13に出撃させるように嫉むだろう。

そんなことはさせれない。

負傷し、更に愛機はエンジンにトラブルを抱えている。

そんな状態では死に行くようなものなんだ。

私たちは只走った。

さわちゃんの元へ向かうために。

だが、それは間に合わなかった。

「あ……」と、りっちゃんの声が聞こえる。

私が空を見上げると、一機のフ兰卡ーが青空に飛び立っていた。

機体の尾翼には黄色く「13」の数字。

そして、それに続くように空に身をやつすフ兰卡ー。

尾翼に描かれた数字は「4」

さわちゃんだ。

しかし、それが分かった所で私たちには何も出来ない。

只、彼女の身を案じることしか

負傷した体で

エンジンが不調の機体を駆る

彼女が無事に帰ってくるように、祈ることしか出来ない。

大空は青く澄み渡っている。

その空を吹き抜ける黄色い一陣の旋風。

大気を切り裂くその黄色い翼は、この日は鋭さが無かった。

2005年4月2日1000

「これまで多くの英雄がストーンヘンジによって散っていった。そろそろ新しい英雄が必要だ。全機、必ず生き残れよ。」

自分のこの言葉が終わると、無線の向こうから「了解」という言葉が幾つも返ってきた。

この日、I S A F軍司令部はストーンヘンジに第二次航空攻撃を敢行した。

前回の航空攻撃は、黄色中隊によって阻まれ前線司令部ロスカナスは陥落。

最果ての東洋の島国ノースポイントまで後退したのだ。

だが、我々は帰ってきた。

幾つもの困難を跳ね返し、この大陸へ

今、自分の眼前のレーダーに映る機影達はI S A F軍の精鋭達だ。その中に、勿論彼も居る。

自分の最も信頼する、相棒も。

ノアズアーク作戦は無事に成功し、二機のエアイクシオン機に分乗していたストーンヘンジの科学者達は無事にI S A F加盟国に亡命することができた。

そして彼等から譲り受けたもの ストーンヘンジの技術情報により、我々を大陸から追い出した八つの超巨大レールガンは丸裸となった。

「スカイアイより全機へ。ストーンヘンジは環状に八つの砲塔が並んでいる。その砲塔の中心部には、ミサイル誘導を阻害するジャミング施設が設置されている。」

これは、彼等から譲り受けた情報の一部分だ。

「スカイアイへ、こちらレイピア3。ジャミング施設は爆弾投下で破壊ということか。」

「そつだ。ジャミング施設に接近し、無誘導性兵器を使用し破壊せよ。」

イカれてるぜ、という声が無線の向こうから聞こえた。

だが、自分はそれに反論しない。

イカれた作戦だと言うことは、このE-767の乗員も百も承知なのだ。

事前のブリーフィングでも、参謀の一人が言った。

司令部は、40%の損失を覚悟している。

と。

オペレーション・ストーンクラッシャー

2005年4月2日1000

サンサルバシオン南西部

ストーンヘンジより20マイル地点

「これまで多くの英雄がストーンヘンジによって散っていった。そろそろ新しい英雄が必要だ。全機、必ず生き残れよ。」

自分のこの言葉が終わると、無線の向こうから「了解」という言葉が幾つも返ってきた。

この日、ISAF軍司令部はストーンヘンジに第二次航空攻撃ストーンクラッシャー作戦を敢行。

前回の航空攻撃は、黄色中隊によって阻まれ前線司令部ロスカナスは陥落。

最果ての東洋の島国ノースポイントまで後退したのだ。

だが、我々は帰ってきた。幾つもの困難を跳ね返し、この大陸へ

そして今、自分の眼前のレーダーに映る機影達はISAF軍の精鋭達だ。

その中に、勿論彼も居る。

自分の最も信頼する、相棒も。

前回のノアズアーク作戦は無事に成功し、二機のエイクシオン機に分乗していたストーンヘンジの科学者達は無事にISAF加盟国に亡命することができた。

そして彼等から亡命の見返りとして譲り受けたもの ストーンヘンジの技術情報により、我々を大陸から追い出した八つの超巨大レールガンは丸裸となった。

「スカイアイより全機へ。ストーンヘンジは環状に八つの砲塔が並んでいる。砲塔の描く環の中心には、ミサイル誘導を阻害するジャミング施設が設置されているとのことだ。」

これは、彼等から譲り受けた情報の一部分だ。

「スカイアイへ、こちらレイピア3。ミサイル誘導が阻害されるということは、ジャミング施設は無誘導性兵器で破壊しろ、ということか。」

「そつだ。ジャミング施設に接近し、無誘導性兵器を使用し破壊せよ。」

イカれてるぜ、というレイピア3の声が無線の向こうから聞こえた。

だが、自分はそれに反論しない。

イカれた作戦だと言うことは自分も含め、このE-767の乗員も百も承知なのだ。

事前のブリーフィングでも、参謀の一人が言った。

司令部は、40%の損失を覚悟している。
と。

この作戦は過酷だ。

だが、勝利の為に避けては通れない。

エルジアに打ち勝ち、ユージア大陸に再び平和をもたらす為には、この作戦を成功させなければならないのだ。

いつもの通りに息を大きく吸い込み、そして吐く。

だが、今日ばかりは頭がクリアには成らない。

口渇が酷い。

いつも以上に緊張している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075w/>

めがりす！！

2011年11月23日20時51分発行